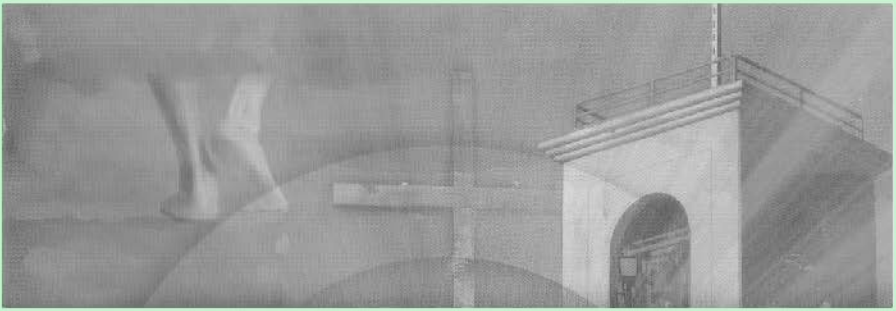
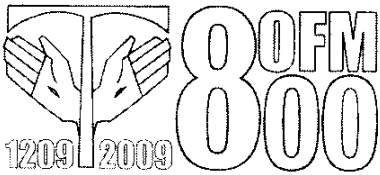


小教区で
兄弟性と小ささのうちに
福音化するために
派遣されて

小教区司牧のための手引き

総本部福音宣教事務局発行
小さき兄弟会総本部
２００９年 ローマ



小教区で
兄弟性と小ささのうちに
福音化するために
派遣されて

小教区司牧のための手引き

総本部福音宣教事務局発行

フランシスコ会総本部

２００９年 ローマ

目 次

プレゼンテーション 5
序文 9

第１章　小教区—神の民の一部 13
１．教会における小教区 14
２．いくつかの挑戦 16
１）社会文化的な背景 17
２）教会的な背景 18
３）小教区の刷新のための選択 20

第２章　小さき兄弟たちと小教区 23
１．歴史の光の中で 24
２．個々の状況に照らして 27
３．本会の規則（会憲・総則）に照らして 30

第３章　小教区におけるフランシスカンの司牧の特徴 37
１．御言葉の証しと奉仕（martyria） 39
１）兄弟共同体と御言葉 39
２）御言葉に奉仕する兄弟共同体 45
２．全ての被造物と共に霊と真理をもって礼拝する人（liturgia）
..... 53
１）御聖体を中心とした兄弟共同体 54
２）兄弟共同体は典礼によって福音化する 57
３．交わり（koinonia）のためのしるしと働き手 63

１）交わりの証しである兄弟共同体..... 64
２）交わりのために働く兄弟共同体..... 65
４．貧しい人々の間にあることに満足し、平和の推進者となる（diaconia）..... 69
１）小ささの証しである兄弟共同体..... 71
２）世間の真っただ中で奉仕する兄弟共同体..... 72
５．全世界に派遣されて（missio）..... 77
１）ミッションを生きる兄弟共同体..... 78
２）宣教者である兄弟共同体は宣教小教区を形成する..... 83

プレゼンテーション

今年２００９年は小さき兄弟会の創立８００周年に当たります。今こそ、新たな熱意をもって、「派遣されて宣教する使命を帯びた観想する兄弟共同体（fraternity-contemplative-in-mission)」という本来のアイデンティティーを生きるために、神から与えられた時です。フランシスコは確かに、生活と言葉によって福音を告げ知らせるために、私たちを世に送り出しました。この派遣（mandate）の意味するところは、さまざまな形態と活動を持つ小教区司牧において、また、非常に異なる場所や状況下で、一定の数の兄弟たちが部分教会のために手足となって奉仕することです。

私がこれから皆さまに提供しようとしている「小教区で兄弟性と小ささのうちに福音化するために派遣されて」と題するこの文書の目的は、兄弟会全体を助けること、特に、小教区にあって司牧活動をする兄弟共同体を助けることです。そして、この特殊な様式の福音宣教が私たちのカリスマ――特に兄弟性と小ささに関して――に基づいたものであることを認識することです。

小教区司牧の現在の状況は、各小教区における福音化に対して深刻ないくつかの課題を突き付けています。この文書は、それらの課題となっている現象について述べています。たとえば、グローバル化、新しいテクノロジー、都市化、文化と宗教の多元化などがあります。それらは、個人や家族、共同体の生活のさまざまな分野に大きな変化をもたらしています。その中には、福音の告知や教会生活、そして、司牧活動（pastoral ministry）のためにより宣教的な新たな可能性を与えてくれるものもあります。しか

し、他方では、これらの変化は新たに複雑な問題を引き起こしています。それによって、私たちの社会生活および共同体生活がより複雑なものになり、小教区における司牧的関わりの刷新がより困難なものとなっています。

置かれた状況の中で時のしるしを読み取り、解釈すること、そして、小教区司牧という観点からの福音宣教について、部分教会の取り組みを歓迎することは、小教区に居住する兄弟共同体の任務です。ここで、２００６年の臨時総集会の報告書に書いたことを思い起こしていただきたいと思います。「典礼行為、秘跡の授与および信心業に対する私たちの注意を逸らすことなく、信仰をすべての中心に戻し、信徒を福音宣教の積極的な担い手となるように励ますために働かなくてはなりません。信徒が天の国の建設のための働き手であることを忘れずに、まだ福音化されていない多くの信徒たちに対して、さらに、現代の新しい現実に対して、たとえば人々が身軽に移動可能となった事と移民という大変な現象に対して特別な眼を向けなければなりません。‘群れの９９匹の羊’のことを忘れずに、‘迷える羊’を探しに出かけなければなりません。なぜなら、迷える羊も、天の国を受け継ぐ者であるからです」（総長の報告書「明晰さと大胆さをもって」112）。

この「手引き」の中でしっかり強調されていますが、小教区における福音宣教のフランシスカン的な特徴の根本的重要性を、ここでも強調したいと思います。実のところ、問題は小教　　区司牧を引き受けるか否かではなくて、小さき兄弟としていかにそれを行うかなのです。その意味で、この文書は、小教区における私たちの在り方と司牧活動の在り方を考察するに当たり、私たちのカリスマの特別な側面に注意を払っています。それだけでなく、

このような形態の福音宣教様式を示すために、第３章では、私たちの会憲や総則など（legislation）に基づき、小教区における司牧活動のフランシスカン的な特徴を、提案として提示しております。このようにして、小教区司牧と私たちの兄弟的な生活とを調和させ、小教区司牧から生まれる要求と小さき兄弟たちに当然期待されることとを調和させるのに役立つ具体的な方法を示すことができるはずです。それらは五つに分けて説明されています。すなわち、御言葉の目に見える証し（martyria）、祝祭（liturgia）、交わり（koinonia）、奉仕（diaconia）、そして、宣教を推進する力（missio）です。これらのどの要素についても、効果的な司牧活動を行う二つの方法が明確に思い起こされます。つまり、さまざまな司牧活動を通して、個人としてまた共同体の生活によって証しすることです。

最後に、「手引き」を積極的かつ創造的に受け入れることについて、序文に書かれていることに注意を払ってくださるようにお願いいたします。兄弟たちが生活し、奉仕する小教区の現実は、多岐にわたっているために、会全体を対象としたテキストはすべてを網羅することはできませんし、すべての個々の共同体のニーズに対応できているわけでもありません。それゆえに、「手引き」つまりこの文書を、小教区における福音化の使徒職を発展させるための、私たちのカリスマに忠実で、しかも教会共同体の期待に応え得る方法を共に見直すために個人的にも共同体的にも役立つ道具として受け止める必要があります。

総理事会より任命された委員会のメンバーの方々に心からの感謝を申し上げたいと思います。この委員会はこの「手引き」を作成するに当たり、総本部福音宣教事務局を助けてくださいました。

特に、兄弟フェルナンド・ウリベ、兄弟ハンス・ゲオルグ・ルーフラー、兄弟イワン・アレヴィ、兄弟ローレンス・ヘイス、兄弟ヴィト・ブラコーネに心からの謝意を表します。また、テキストの第一原案をイタリア語で作成してくださった兄弟マッシモ・テドルディとテキストの最終校正をして、出版を技術面で助けてくださった兄弟ルイジ・ペルジーニにも感謝申し上げます。

御子を福音としてこの世に送ってくださり、教会をその福音化と召命とミッションにおいて刷新するために、聖霊をこの世に送ってくださった慈しみ深い御父が、教会となられたいと聖なる処女マリアと偉大なる王の使者である聖フランシスコを通して、小教区で働くすべての兄弟を祝福し、部分教会に対する彼らの奉仕を実り多きものとしてくださいますように。

２００９年１月６日
主の御公現の祝日にローマにて

総長　兄弟ホセ・ロドリゲス・カルバッリョ、OFM

序文

福音宣教を扱った１９９７年の総集会の総括文書が総理事会に要請したのは、小教区における私たちの在り方と司牧的関わりについて検討すること、そして特に、部分教会と交わりつつ、私たちのカリスマに忠実に、新しい福音宣教の形態と方法を列挙して、私たちの司牧活動の「様式」について考えることでした[1]。

その総集会の要請を実行するために、総理事会は国際委員会を任命しました。委員会は、全ての構成単位（管区）からデータを集め、集められた厖大な資料をもとに、総理事会が使えるような現在の福音宣教の実践についての研究論文を作成するという任務を負っていました。

これは第一段階と考えられています。事実、総長は２００３年の総集会への報告書の中で、こう言っています :「私たちは小さき兄弟である限り、小教区における自分の在り方を検証し、新しい在り方と使徒職の形態を示して行くという長い道のりを歩むことになるでしょう。私たち全員が、私たちの生活様式に沿って惜しみなく、効果的に神の民と現代の人々に奉仕するための新しい計画、形態、方法を考え出すというプロセスの中に今おり、また今後も居続けることになるのです。」[2]

この長い、複雑なプロセスを具体的なものにし、新しいメンタ

---

[1] 1997 年の総集会の総括文書「記念から預言へ」オリエンテーションと提案 14。その他、1997 年－2003 年の 6 年間の優先課題 4、2003 年の総集会の総括文書「主があなたに平和を与えてくださいますように」提案 19、2003 年 - 2008 年の優先課題「兄弟的な世界を目指してキリストに従う」4 を参照。

[2] ジャコモ・ビニ、2003 年の総集会への報告書「神は世を巡るようにと私たちを招かれた」p19。(「公報・２００３年総集会」p22、p24 参照)

リティーを鼓舞するために、２００４年に開かれた福音宣教のための国際評議会は、小教区における司牧的関わりを活性化するための「手引き」を作成するように提案しました。

総理事会は評議会の勧告を承認し、総本部福音宣教事務局を補佐して、小教区司牧の活性化に関する「手引き」を作成する委員会を任命しました。委員会は委ねられた任務を全うするべく何度も会合を開きました。

時間をかけて入念に練った結果、ようやく「手引き」が完成しました。また、福音宣教に関する会の最近の文書、特に「全世界をキリストの福音であまねく満たすために」（1996 年）を考慮する一方で、極めて異なる場所や状況に置かれた小教区で生活し、働く多くの兄弟たちを考慮して、「手引き」は、考察の出発点として、彼らの奉仕への動機を高め、本来の実り多きインスピレーションを新たにするための一連の要素を提供したいと考えています。

「手引き」が目指す目標は、小さき兄弟たちが全世界に遣わされたのは「言葉と行いで、主の御教えの証しをたて、彼以外に全能の神はましまさないことを告げ知らせるためであること」（全兄弟会に宛てた手紙９）を決して忘れずに、私たちのカリスマに従って、この伝統的な福音宣教という使徒職を遂行するにあたり、兄弟たちを具体的に助けることです。

この「手引き」 は三つの章で構成されています。第１章では、人々に近いという重要な側面から小教区それ自体を神の民の一部と捉え、その教会的な組織を教会の重要な選択と捉えて、小教区を検証しています。

第２章では、小教区を小さき兄弟会の枠内で捉えて検証しています。「兄弟－小教区」のように二足のわらじを履くような困難な

歴史を振り返り、今日兄弟たちが働いている小教区の多種多様な形態を見直し、そして私たちのテーマに関する規則（会憲や総則等）に綿密な注意を払っています。

第３章では、「手引き」は、小教区における司牧的関わりのフランシスカン的な特徴を提案として示し、小教区司牧を私たちのフランシスカン生活と融合させる方策と、小教区司牧から生ずる要求と小さき兄弟の生活に特有のものとの調和を図る方策を具体的に提示しています。これらのことは次のような五つの要素として区分されています：御言葉の証し（martyria）、祝祭（liturgia）、交わり（koinonia）、奉仕（diaconia）、そして、宣教を推進する力（missio）です。

各章の終わりに、「手引き」を創造的に受け入れるために不可欠の、個人としてまた共同体として掘り下げるための提言を付してあります。提言は、その章の内容の有効性を確認するために読んだり、研究したりするためだけのものでもなければ、あらゆる状況に当てはめるためのものでもありません。むしろ、「手引き」の中に述べられた考察すべき点や動機を、私たちに委ねられた小教区の具体的な現実と「手引き」に示される司牧的関わりを心に留めて、直視することが求められているのです。

総本部福音宣教事務局は、「手引き」 が、教会と交わりつつ、また現代のニーズに応えつつ、小教区における司牧職を、兄弟性と小ささというフランシスカン的なやり方に従って福音宣教する現場として、また様式として高めるために、「創立の恵み」と共に、さらなる刺激となることを願っております。

兄弟　ネスター・イナシオ・シュウェルツ、OFM

総本部福音宣教事務局長

第１章　小教区—神の民の一部

この第１章では、小教区の現実それ自体は、現代の複雑な社会・文化的背景と教会の背景から生ずる現在の諸問題の性質についてなされた公会議後の実り豊かな考察をもとに、説明されています。最後の部分で、小教区における司牧的関わりの刷新のために、いくつかのオプションを紹介します。

１．教会における小教区

「小教区は、部分教会において、恒常的に設立された、一定のキリスト信者の共同体である。その司牧は、教区司教の権威の下に、その固有の司牧者としての主任司祭に委託されている[3]。」教会法典の定めによれば、小教区は教区の一部であり、言いかえれば、司祭団の協力のもとに牧するよう司教に委託された神の民の一部分である。こうして自分の牧者に結ばれ、その牧者によって福音と聖体を通して聖霊において集められた教区は、部分教会を構成する。この中に、一、聖、公、使徒継承のキリストの教会が真に現存し、働いている。[4]

第二バチカン公会議[5]から生まれた最近の教会の公の教えは、小教区の現状について述べると同時に、福音と人々に忠実に応えるために時と場所に従って取り入れられるべき司牧的関わりのダイナミックな複雑さについても述べています。

この意味で発展してきた考え方は、次のような観点に焦点を当てています。

- **小教区と部分教会との関係**。小教区は部分教会との接点であり、事実、司教区の日常生活の根本的な中心となっています。[6]
- **小教区は信徒たちの共同体**。１９８８年の使徒的勧告「信徒の召命と使命」によれば、本来小教区は組織とか区域ではな

---

[3] 教会法典　第 515 条、第 1 節
[4] 第二バチカン公会議「教会における司教の司牧任務に関する教令」11。
[5] 教会憲章 1,2,5,7,8。
[6] ヨハネ・パウロ２世、2003 年の使徒的書簡「急速な発展」45

く、むしろ一つの心に結ばれた兄弟の集まりとしての「神の家族」なのです。・・・つまり、小教区は感謝の祭儀を中心とした共同体なので、一つの神学的実体のうえに設立されているのです。・・・これは、小教区が信仰共同体であり、有機的な共同体であるという事実を根拠にしています。つまり、この共同体は、叙階された奉仕者と他のキリスト者によって構成されており、そのなかで教区司教の代理である司牧者は、部分教会全体と結ばれる位階的なきずなそのものなのです。それゆえ、小教区は地域に根ざした教会です。そしてある意味では、社会のただなかに生きているものこそ教会なのです。[7]

- **司牧的選択としての小教区**。小教区は部分教会が地域に根ざしたもの、すなわち信徒が教会を具体的に体験できる場となったものであるがゆえに、さまざまな方法で人間の体験のただ中に福音を形作るために、教会が歴史の中でした選択であり、司牧的な選択なのです。[8]
- **人々に近い活動の場としての小教区**。ラテンアメリカの第三回司教協議会の文書によれば、小教区は養成と信仰の成長において個人や家族を支えるならば、教会の全体的な機能を一定の方法で果たすものとなります。小教区は、共同体やグループや運動などの調整と活性化の中心なのです。聖体祭儀とその他の秘跡は、教会の普遍性をユニークな形で印象付けます。小教区は、キリスト信徒にとって出会いの場となると同時に、小さな共同体の限界を越えて人的・物的に兄弟的な分

---

[7] ヨハネ・パウロ２世使徒的勧告「信徒の召命と使命」26
[8] ヨハネ・パウロ２世使徒的勧告「アメリカの教会」41

かち合いをする場となります。事実、小教区では、特にミッションの分野と人間の尊厳を大切にする分野で、小さな共同体の能力を越えた一連の奉仕への取り組みがなされており、それなりに安定した移民や疎外され隔てられた人々、信仰を持っていない人々、および最も困窮している人々へ支援の手を差し伸べています。[9]

２．いくつかの挑戦

小教区は、部分教会の細胞である限り、福音のメッセージを具現し、キリストが教会に委ねられた救いの溢れるほどの豊かさをすべて惜しみなく与える義務があります。それゆえ、小教区は常に二つの忠実さを心に留めていなくてはなりません。すなわち、キリストの福音に忠実に、その尽きることのない豊かさを示すこと、そして、教会に忠実に、教会がこれまで決して安易な道を辿ってきたわけではないということを、メッセージの受け手に知らせることです。この二つの現実についてあまり忠実でないとするなら、教会は、現代の人々に空しい手を示していることになるか、さもなければ、誰に対して福音を告げ知らせるべきかを知らないことになります。

小教区が**誰に対して努力を傾けるべきかその相手を知ることが絶対に**必要であるということ、そして、現代の社会文化的、宗教的な断面図を簡潔に示す必要があるということは、指摘されてしかるべきかと思われます。小教区は現代人をその偉大な可能性とダイナミックな複雑さを含めて理解することができて初めて、現

[9] プエブラ文書 64（1979 年）

代人と効果的に対話し、彼らに対して勤勉な管理者として善いことを分け与えることができるのです。

1）社会文化的な背景

現代の社会文化的・宗教的背景は、特に次のような現象で特徴づけられています：

- **グローバル化と新しい技術**：コミュニケーションや生産手段、製品や情報の分配などが驚くほど手軽になったおかげで、世界はグローバル化が進みました。その一方、世界は「グローバルマーケット」の様相を呈し、多くの人々が疎外され、排斥されて、大きな移民のうねりを引き起こしています。そのような現象が広がっているというメッセージが絶えず押し寄せることによって、グローバル化は、価値観や倫理観、被造物との関係、人間関係、ひいては家族関係にまで悪影響を及ぼす傾向があります。しかしながら、それとは対照的に、グローバル化は自分だけの「世界」や自分だけの「村」に閉じこもる傾向から逃れる道も備えています。しかし、そのような反応も結果的には、分裂を生み、閉鎖的な社会と極端な個人主義を形成してしまいます。[10]

  グローバル化は小教区にとっても問題となっています。小教区を教会の代表とするならば、小教区は歓迎と歓待の場となり、普遍的な顔を持つように求められます。[11] 私たちは人間家族の問題と必要を受け入れているので、私たちフランシスカンにとって全世界は修道院なのです。

---

[10] ヨハネ・パウロ 2 世、アジア・シノドス後の使徒的勧告「アジアにおける教会」41。

[11] ヨハネ・パウロ 2 世、使徒的勧告「ヨーロッパにおける教会」100。

- **都市化**。大都会の周辺に見られる人間の一極集中は、非人間化と横軸の喪失へとつながります。空間の不足と自然との触れ合いの不足は、人間的で共同体的なバランスを破壊します。環境汚染の問題がありますが、五官で感じられる汚染は、内面の汚染や人間関係の極端な汚染の現れとなります。しかし、それはまた、私たちにとって自分の存在価値を示すチャンスでもあります。たとえば、人々の側に立ち、福音的な兄弟共同体として人々の家庭と交わり、そうすることによって、すべての人の人間化と社会化を促す場となるのです。[12]
- **文化と宗教の多元的共存**。今日では、人々は多様な文化と多様な宗教をもつ社会の中で暮らしています。このような現実は、他者に対して心を開くチャンスとなり、相互を豊かにし合う役に立つと同時に、「相違」を恐れる心を生み、人と人との間、異なる文化の間、異なる宗教の間に壁を作る原因ともなります。このような現象を前にして、多元的共存は、無関心の態度と閉鎖的なメンタリティーを生み、その結果、キリスト教信仰の価値を証しし、伝えることが難しくなるか、あるいは、それらの本当のアイデンティティーを理解するのが難しくなります。[13]

２）教会的な背景

教会内には、変化の豊かな土壌があると同時に、抵抗や退行の土壌もあります。同様に、第二バチカン公会議後の教会論が、それに続く深い分析と発展と共に受け入れられたことを軽視しては

---

12 「ヨーロッパにおける教会」15。
13 「アジアにおける教会」29。

なりません。特に、次のような傾向に注目したいと思います：

- **さまざまな教会論の中にある対立要素**。「現代世界憲章」によって門戸を世界に広く開くように駆り立てられた教会と並んで、新しい状況に直面する熱意も力もなく、自らを閉ざした教会もあります。
- **教会運動の成長と新しい共同体**。一般的にはまだ聖職者偏重の傾向が強いものの、信徒の果たす役割の重要性は目に見えて増しています。事実、信徒が聖職者の「使い勝手のよい存在」になったために、福音化における信徒としての自らの役割を果たすのを難しくしてしまっている例も少なくありません。
- **スピリチュアリティ体験の追求**。霊的なことへの渇きを癒そうとする試みの中で、個人的な神との関わりのない様々な形の宗教心を選ぶ人や、現代の世界、社会、文化、政治への嫌悪感を露わにし、この世の現実を「汚染されたもの」とみなす人に出会うことがあります。
- **共同体や秘跡の実践から離れてしまっている**。現代では、迷える羊のたとえ話を逆の形で読む必要がありそうです。つまり、一匹が迷っているのではなく、９９匹が群れを離れてしまうという例です。
- **教会を離れていた人々が戻ってくる現象**。信仰共同体からしばらく離れていて、再び戻ってくる人々の数が増えているところがあります。彼らは司牧者側の大いなる忍耐と寛容な受け入れ、そして個々人に相応しい同伴を必要としています。
- **小教区の通常の司牧**。習慣的な計画に基づき、しかるべき手段やエネルギーを注いで行われる司牧は、小人数の人（群れ

に残っている人々）が対象ですが、その結果、教会から遠ざかっている人々（他の 99 匹にあたる人々）のための時間や労力はあまり残っていません。

- **多くの信徒たちのが抱いている要求**。彼らは信徒の幅広い参加を得て、対話を促進しながら、また、貧しい人々と連帯して、教会をもっと人々に奉仕する場とすることを願っています。
- **社会に対する本物の司牧の必要性**。これは、通常の司牧活動が余り得手としていない、あるいは欠落している分野です。そうした欠落や不得手によって、御言葉の奉仕職と典礼と慈善活動の間のバランスが崩れやすくなっています。こうして、慈善活動の側面に払われる注意が明らかに欠如して、それが行われている場所においてさえ、慈善とは援助をするだけのことだと思われています。多くの場合、欠けているのは、貧しい人々、人間の地位向上、効果的な社会変革のために働こうとする意気込みです。

３）小教区の刷新のための選択

現在の社会的・文化的、宗教的・教会的な背景から、小教区についての深い疑問点がいくつか浮かび上がってきます。小教区とは人々に近い教会であるという事実から小教区に課せられていることがあります。それは、現代人のニーズから眼をそむけてはならないということ、そして、自分の住む地域で自分の存在意義を見出そうとしている多くの兄弟姉妹の叫びとなっている要求をなおざりにしてはならないということです。そのために、小教区は絶えず司牧的な対話に向かって駆り立てられています。それには

以下のような選択が含まれます：

- **既存のことをただ守ろうとする司牧を越えること**。それは、現代が私たちに突きつける挑戦を新しい広い心と勇気ある精神で受け入れるためです。
- **福音宣教の真のモデルとしてミッションを選び取ること**。このことは、いつもの習慣となっている司牧を全面的に見直すこと、つまり、あらゆる形態の司牧を見直し、刷新することを意味します。
- 世界的なレベルで起こっていることに対して、**積極的なアプローチを試みること**。たとえば、宗教の複数性、移民の問題、地域の状況に即した**諸国の民への**(Ad gentes)アプローチなど。
- **小教区の中にあるあらゆる組織や個人を総動員して、司牧の共同体モデルを作ること**。たとえば、修道会、信徒団体、運動、グループなど。そのような組織を通じて初めて、小教区司牧は連帯の司牧となり、そこではすべての人がくつろぐことができ、すべての人のための奉仕を育むことができます。そうなった時に、小教区は「人間社会に深く根ざして生き、働く人々の家庭の中で、人間社会の持つ憧れや困難と連帯して生きる教会」となることができるのです。[14]
- 福音宣教の第一の道となる**個人的な触れ合いを大切にすること**。そこにおいては、善き牧者は人々との直接の出会い、率直で建設的な対話、己の旅路において現実の状況を受け入れる心構えに最重点を置いています。
- **生活を全く新しいものにするジェスチャーを示すこと**。たと

[14]第四回ラテンアメリカ司教協議会、サント・ドミンゴ文書 59（1993 年）。その他、プエブラ文書 649-650、アメリカにおける教会 41、アフリカにおける教会 88 以降参照。

えば、ライフスタイルを変えるとか、貧しい人々を優先することは、教会のミッションに携わるすべての人にとって、地域レベルおよび国際的なレベルで正義のために献身的に働くことであり、さまざまな形態の疎外によって苦しむ人々のそばにいることであり、弱い人々や犠牲となっている人々と連帯して彼らの権利を守ることであり、紛争地帯において福音的な選択を証しすることを意味します。

- 小教区の**次のようなイメージを大切にすること**。異質なものは何もなく、すべてが注意を払われるような**場所に根ざした教会**。すべての人、特に取るに足りないと思われている人々や疎外されていると感じている人々を温かく迎え入れるような、人々に近い教会。すべての人にとって福音に至る道である**質素で謙遜な教会**。人々が集う道具となる**人々の教会**。交わりとミッションの神秘をもった**エウカリスチアを祝う教会**。

第１章に関する考察のための提言

① **小教区が置かれている社会的・文化的・宗教的・教会的な背景を読み、分析し、解釈しなさい。**
② **小教区の生活に既に見られる刷新のしるしを認識しなさい。**
③ **小教区共同体の福音化するミッションにとって最も重要で緊急な課題は何か明らかにしなさい。**

第２章　小さき兄弟たちと小教区

この章では、小教区と小さき兄弟たちとの間にしばしば見られる難しい関係を歴史的に説明した後、世界のさまざまな場所で私たちの兄弟共同体が行っている小教区司牧の興味深い類型を提示します。最後の部分で、この問題に関する会の規則（会憲や総則等）が定めている多くのことをまとめて紹介します。

１．歴史の光の中で

フランシスカンの使徒職は初期のころは、庶民向けのものであると同時に巡回型のものでしたが、小教区と何らかの関係がありました。実際にあったことですが、聖フランシスコの話によると、兄弟たちは悔い改めと平和を説くためにイタリアとヨーロッパの各地に二人ずつ赴くことになっていました。彼らは常に、まず司教または小教区の主任司祭から説教する許可を得なければなりませんでした。

１４世紀の初頭に、ボスニアに最初のフランシスカンの宣教師が赴いたころ、彼らは教皇から小教区を作り、そこの主任司祭になる権限を得ていました。ただし、それは教区の司祭が不在の宣教地区に限るという条件付きでした。これは伝統となって、今も続いています。一方で、当時の法学者の間では、小教区を修道者に委託してよいものかどうかについて活発な論争が行われていました。この論争は、１６世紀に聖座の決定に委ねられるまで続きました。

トリエント公会議による改革（１６世紀）に伴い、次のような組織を含む小教区の普遍的な「モデル」が作られました。すなわち、管轄区域、転任のない主任司祭、そして教会の収入源です。このようなモデルは第二バチカン公会議まで続きました。

１８世紀には、修道者が小教区という環境に疑問を抱き、小教区は修道者の徳を高めるのにふさわしい場ではないと考えました。１７００年代に至るまで、聖人伝の中に記録されている主任司祭は、ブリタニーのイヴだけでしたが、彼はフランシスコ会の聖人

伝の中では、主任司祭としてよりも第三会員として記録されています。

教皇ベネディクト１４世は、１７００年代の中ごろに、教令を出し、特別に必要のある場合を除いて、修道者は小教区における司牧をしてはならないと命じました。

ラテンアメリカの新しい国々では、兄弟たちは小教区の設立を他者に任せていたので、先住民の間をより自由に巡回するミッションに専念していました。

ヨーロッパでは、法律的な面での啓発が進んでいたころ、国家当局は経済的な生活の基盤を持っている聖職者だけを受け入れていました。そのようなことが可能だったのは、ひとえに小教区によるものです。それゆえ、フランシスカンも含めて、修道会は小教区司牧を引き受けざるを得ませんでした。それは、生存のための手段であったのです。

スラブ諸国に見られるように、ハンガリーでは、小教区の管理運営が兄弟たちの手に委ねられるようになり、修道院教会の閉鎖を避けるためには、小教区教会に変わることを余儀なくされました。一方、オーストリアでは、おそらくは財産を管理するという面倒な責任がないためと思われますが、フランシスカンたちは学校に派遣されることを好むようになりました。イタリアでは、１９世紀の半ばごろ、一連の廃止法が出されるに伴い、兄弟たちは小教区の管理運営を引き受けるという条件で、存続することができるようになりました。メキシコでは、１８５９年に修道生活は違法であるとの宣言が出され、１８６７年に修道生活が禁止されて後、一部の兄弟たちは、「小教区の司祭館」または「大学」に潜む形で生活を続けることができました。

１９１７年に教会法が小教区制度に対してより修道的、司牧的、そしてほとんど宣教師的とも言える側面を与えたので、小教区についての定めが、会の規則、たとえば総集会の宣言や会憲、総則等に記されるようになりました。１９２１年に小教区について都合のよい決定がなされて後、再び、小教区が昔のように共同生活と従順を妨げる組織になるのではないかとの危惧が生まれました。また、小教区を引き受けるということは、会則の遵守を免除すべしとの要請を明らかに伴うものだと言われていました。それは、より高次の善、すなわち「人々の善」を口実として正当化され得たのです。１９２７年には、６２３の小教区がフランシスコ会の管理のもとに置かれました。ただし、この委託依頼が、教区司祭の数が足りなかったことによる一時的なものであったことは明らかです。１９５７年に、小教区の司牧に代わるものとして、チームで巡回して行う大黙想会、説教、**諸国の民への**（*ad* gentes）ミッションなどの他の使徒職を引き受けたとは言え、６年間に引き受けられた小教区の数は１４４と推定されています。

第二次世界大戦後、ヨーロッパから米国へ大勢の移民が押し寄せたために、フランシスカンはその国際色の豊かさを生かして、自国人を支えるために、移民の数が多い多くの国々で「属人小教区」を設立しました。

アフリカの新しい宣教地では、ほとんどすべての司教が、兄弟たちに、一部の小教区の世話を引き受けることを条件に兄弟共同体の開設を許可しました。

フランシスカンによる小教区の司牧の増加は、教会のニーズに喜んで応えようとする気持ちの表れであり、聖フランシスコ自身もこう述べています：「私たちは、霊魂の救いのために、聖職者の

働きを助けるように遣わされたのです」(2 チェラ 146)。教皇パウロ６世は、カプチン会の総長と総理事会との対話の中で次のように述べています:「私はフランシスカンの生活様式が独特なのを知っています。あなた方はその生活様式を小教区の司牧という狭い枠に限定したくないのでしょう。他の形態の使徒職というものを自由に育んで行きたいのでしょうね。しかし、それには、例外がなくてはなりません。」[15]

第二バチカン公会議の要請に応えて、フランシスカンのアイデンティティーについて検討した結果、１９７０年の小さき兄弟会の会憲には、小ささと兄弟性の精神で生きることが可能ならば、小教区の司牧を引き受けるようにとの要請が盛り込まれています。１９８７年の会憲でも、２００４年の会憲でも、小教区は、常に兄弟性と小ささの生活と証しを守り、司教との協力の精神を守りつつ行うことができる使徒職の一つの形態であることが繰り返されています（会憲 84、111、115、総則 54 参照)。２００３年に作成された最近の統計によれば、小さき兄弟たちの２７パーセントが、主な活動として小教区の仕事に打ち込んでいます。

２．個々の状況に照らして

新開地へ宣教に赴こうとする宣教者魂と部分教会を助けようとする熱意は、外面の異なるさまざまな種類のフランシスカンの小教区司牧活動を生みだし、それは、今も成長を続けています。そこから、小教区のタイプや特徴を簡単に示しながら、私たちの兄弟共同体によって活性化された小教区の豊かな全体像を提示しよ

[15] カプチン会総長および総理事会との謁見、1963 年 12 月 17 日

うとする試みが生まれています。そこにはもちろん、可能性や価値と同時に限界や危険をも含まれています。

以下のリストを見れば、宣教者精神がいかにしばしば自らを、歴史上および全世界の異なる背景において最も絶望的な状況と一体化させ、融合させる方法を知っていたかを知ることができます。

- **諸国の民への（ad gentes）ミッションにおける小教区**。多くの宣教地において、小教区は教会の存在を示し、教会をそこに根付かせる一つの方法、時には唯一の方法となっています。司教たちはしばしば、そのような在り方を取るようにと、宣教師たちに執拗に要請しています。フランシスカンの兄弟共同体は、会を根付かせる事や会のカリスマを伝える事をそれほど重視せずに、独特な方法で福音宣教と福音の文化内開花を目指しています。
- **キリスト教が少数派となっている状況下における小教区**。本会は、イスラム教や他の宗教、宗派が多数派である国々に居住しています。小教区は、カトリックの存在を国家に認めさせる唯一の手段ともなっています。そのような状況においては、小教区の司牧は「小さな群れ」に対する不可欠の奉仕となり、人間の地位向上を図り、福音と信仰を無言で証しするものとなります。通常、その場合の司牧活動は、人々への福音の告知や宣教師的な創造性を発揮することよりも、「既にいる信徒を守る」ことが主となります。場合によっては、それは協力であったり、諸宗教間の対話やエキュメニカルな対話であったりします。
- あらゆる小教区の活動に関して多くのプログラムと多くの明確な指針を持つ**良く組織された司教区における小教区**。その

ような部分教会においては、共同体の中に創造的な多様性の場がなかったり、私たちのカリスマを具現する場（司祭である兄弟や修道士である兄弟）や、奉仕の場（在世フランシスコ会とヤング・フランシスカン[GIFRA]）の兄弟共同体や、正義と平和とエコロジーのための活動や、フランシスカン精神の対話や、典型的なフランシスカンの奉献等を組織する場）がなかったりすることがしばしばあります。

- **広域小教区**。多くの場合、私たちが居住する部分教会では、フランシスカンのカリスマが司教や聖職者たちに評価され、尊重されています。また、私たちは多くの住民や信徒を抱えた広範囲にわたる小教区を任されています。共同体を訪れるためには、危険な状況下を長距離にわたって旅をしなければならないこともしばしばです。そのような状況では真の福音化を提供することは難しく、秘跡を授与する司牧が精いっぱいです。移動距離が長く、その間一部の兄弟たちが共同体を留守にせざるを得ないために、兄弟共同体には負担がのしかかり、共同生活や共同体としての祈り、修道院会議といった私たちのカリスマの根本的な要素を生きることが難しくなっています。
- **大都会における小教区**。大都会の中心や周辺に兄弟たちが居住することもあります。そのような場合、人々は異なる宗教が混在する環境で生活しますが、兄弟共同体にも様々なチャンスと課題が与えられることになります。これらの場合、福音宣教のための活動の場は、かなり創造的で質の高いものが要求されます。それは、兄弟たちが住んでいるところの信徒たちを探し出し、彼らと対話し、彼らの人間の地位向上に寄

与するためです。

- **堅固な組織と司牧活動の輝かしい歴史を持ちながら、新しい福音宣教を必要とする小教区**。私たちの小教区の多くは、内部組織がしっかりした部分教会で、長期にわたる活動と司牧の伝統を持ちながらも、文化と宗教の大きな変化に見舞われています。小教区それ自体は、長い歴史を持ち、大きな聖堂を備えており、それは、それらの小教区が何世紀にもわたって信仰と芸術を維持してきた栄光の証しです。ここで出てくる危険性とは、周囲の環境が変化しているにもかかわらず、これまでと似通った形の司牧活動を維持しようとし、司牧の対応が過去と同じであり続けることです。
- **小教区と巡礼聖堂**。その中心に巡礼聖堂を持っている小教区の数は一定していますが、そこに祀られている聖人が有名なため、また、由緒ある場所がらとそこに息づく独特な霊性のために、多くの信徒たちを惹きつけています。だからといって、自動的にそこに所属する信徒の教会共同体が生まれるわけではありません。そのような場合に出てくる司牧の危険は、信徒たちに深く浸透していない「使い捨て」（その場限り）の信心に妥協してしまうことです。

３．本会の規則（会憲・総則）に照らして

「小教区」という語は、現行の会憲には一度しか出てきません。それなのに、ただ一度使われたその語は、大変重要な意味を持っています。なぜなら、教会法が基本法と定めている規則の中でそれが使われているからです。この語が出てくるのは、フランシス

カン召命の根本的な側面の一つである福音宣教について述べている第５章です。この章のタイトルは、「全兄弟会にあてた手紙」から取られた「神はあなたがたを全世界にお遣わしになった」であり、それによって、ミッションがその本来の意味で聖フランシスコによる福音理解において最重要視されていることがわかります。

小教区について述べた条項が、小さき兄弟たちの福音化する召命が基盤とする一般原則をなしていることは意義深いことです。実際、すべての兄弟たちは福音を宣べ伝えるよう、派遣されており（会憲 83:1)、また、彼らの福音宣教は言葉と行いをもってなされる（会憲 83:2）と宣言した後、第３節の条文は、福音宣教を全ての兄弟の責任であるとし、それに続いて、様々な福音宣教の場を並べています。その中に小教区司牧があります。この部分をテキストはこのように表現しています:「兄弟たちは、どこにいても、どういう仕事をしていても、福音宣教の任務に携わる。兄弟的交わりにおいては、観想と悔い改めの生活、さらに共同体のためになされる様々な仕事を通して、また人間社会にあっては、精神的および肉体的活動、さらに小教区の司牧活動や他の教会関係の施設の活動をとおして、ついには単にフランシスカンとして存在するというあかしによって神の国の到来を告げる」（会憲 84)。

兄弟たちが福音宣教のために働くべき普遍的（どこにいても）で多元的な（どういう仕事をしていても）状況が第一に述べられています。その次に、小教区における司牧活動は、基本的には教会運営としてではなく、福音宣教の任務として、また、別の形の試みとしてではなく、使徒職として捉えられています。第三には、それは小さき兄弟たちが行うべき他の多くの使徒職の中の一つとして扱われています。このような基本原則は、第 116 条に再度述

べられています：「私たちの兄弟会全体は宣教するものである。そして、聖フランシスコの模範、および会則で明らかにされている彼の意志に従って、教会の使命に与る。それゆえ、一人ひとりの兄弟は、自分の責任を自覚して、宣教活動における自分の役割を果たす」（会憲 116）。

上に述べたような特徴に照らしてみると、当然のことながら、これらの特徴は小教区の司牧にも当てはめることができます。一方では、福音化するミッションを導く一般原則に照らして、また他方では、フランシスカンの福音宣教方法と使徒職の組織に関する会憲の規定に照らして。

福音宣教の一般原則を小教区の使徒職に当てはめるということは、この使徒職を、悔い改めと兄弟性においてキリストに従うことであると考えるという意味です。これの意図するところは、私たちが属する家族（会、管区、修道院）との交わり、および生活によるあかしを始めとして、すべての人間との交わりへと向かう態度のことです。兄弟性という表現には、フランシスカン家族のすべてのメンバーとの一体化と協力が含まれており、貧しい人々の間に、そして、世俗の人々の間に居住することが最優先の課題と考えられているのです（会憲 85-88 参照）。

フランシスカン的福音宣教の特徴についての基準の中で、以下のことが重要と思われます。

- **私たちの生活様式の証しとしての側面は次のような点に表れています。**カトリックの信仰を謙遜に、力強く、喜びをもって告白すること、人間がその尊厳を取り戻すために、小さき者として、常に現代の人間の持つ諸問題に注意深く応えて行くこと（会憲 96-97 参照）。

- **神の御言葉を告げ知らせること**が、そのために最優先されます。私たちのアイデンティティーを越えて、綿密な準備をしなくてはなりません。説教が人々の役に立ち、人々を啓発するものとなるためには、説教する人自身が自らを啓発の真の源泉で養成し、祈りによって強められた深い信仰に根ざすこと、そして、その人の生活が言葉と一致していること、その人が適切で正確な言葉の使い方を知っていることが必要です（会憲 100-104 参照）。
- 小教区司牧の優先的な課題の一つは、**信徒たちの聖化を促進すること**です。それは特に赦しの秘跡に特別な配慮をすることによって行われます（会憲 108 参照）。
- 福音宣教と人間の地位向上のためには、**社会的なコミュニケーション手段（マス・メディア）を活用すること**が適切です。常に手段それ自体が目的となることなく、手段としての特徴を備えていることが大切である一方で、小ささの精神で活用されることが大切です（会憲 109 参照）。

会憲では、フランシスカン生活の根本的な価値、特に兄弟性と小ささを維持することに最大の関心が向けられています。ですから、福音宣教の奉仕に関して言及する際には、会憲はこう述べています：「本会は、神の民が行うべき福音宣教のつとめを推し進めるすべての活動、および、私たちの兄弟性と小さき者としての身分に矛盾しないすべての活動を行うことができる」と。そしてさらに、「部分教会で働く兄弟たちは、司教およびその協働者たちを助ける心構えをもち、その司牧方針、特にフランシスカン・カリスマと調和するものを実践する」と（会憲 111，115:1）。

福音宣教の使命と司牧活動について述べている（会憲、総則な

どの）規則全般の条文には、小教区も含まれていることが明らかです。本会の総則は、この件に関しては極めて明快に次のように述べています:「小教区を引き受ける時、これを総長に報告するが、管区長は、小さき者であることと、兄弟性の証しをより輝かせるような小教区を優先させる」（総則 54:1）。

小教区における司牧活動に関する本会の総則のこの部分をちょっと見ただけで、この使徒職が私たちのカリスマの独特の要素を輝かせる福音宣教の一形態と捉えられていることが明らかです。

結論として、１９８７年と２００４年の会憲および２００４年の総則の中で、初めて、小教区の使徒職は、フランシスカンの使徒職の可能な一形態として示され、正規の使徒職として扱われるようになりました。

小教区における司牧活動の活性化について。その責任は、管区福音宣教事務局長にあります。「福音宣教事務局長の職務は、管区長の指揮の下に、管区における福音宣教のすべてを促進し、調整することである。福音宣教調整役の務めは、管区規則と個別規則の規定に従って、様々な福音宣教活動のすべてに関して、調整することである」（総則 49:1,3 参照）。それゆえに、小教区における司牧が福音宣教事務局長の権限内で行われるように、司牧活動を活性化する任務、権限、および方法を規定した個別規則を入念に作成する必要があります。

第２章に関する考察のための提言

②　小教区の歴史を振り返って、活気のある時と危機的な状況の時とを認識する。

② 兄弟たちが小教区の責任を引き受けた時の動機を調べ、それが歴史の流れの中でどのような貢献をしたかを認識する。

第３章　小教区におけるフランシスカンの司牧の特徴

フランシスコ会の源泉資料と教会および本会の公文書に基づき、小教区の活動とフランシスカン生活を調和させ、この使徒職において小さき兄弟の特徴を生かして働くための手引きを提供するために、下記のような考察のポイントを提案します。

そのために、これから検討する五つの補足的な要素とは、すなわち、御言葉を聴き、証しすること（martyria）、祝祭（liturgia）、交わり（koinonia）、奉仕（diaconia）、宣教を推進する力（missio）です。

１．御言葉の証しと奉仕（martyria）

「あなたたちの心の耳を傾けて、神の御子の声に従いなさい。心を尽くして主の掟を守り、完全な精神をもって主の勧めを果たしなさい」（全兄弟会にあてた手紙 6）。

聖フランシスコが「全兄弟会にあてた手紙」の書き出しは、神の御言葉が彼にとって生命の糧であったことを強調しつつも、小教区における活動の特徴を発展させるためのいくつかの極めて貴重な方向性を示しています。彼は、御言葉をまず敬意といつでも従う心構えを持って聴き、次に心に留め、それからそれを実践するようにと論理的に勧めています。外面から内面へ、そして、心の深みから目に見える実践へと向かう、このような論理的に矛盾のない動きは、極めて一貫性のある方法です。まるで、御言葉を聞く耳は、それについて思いめぐらす心とつながっていなければならず、手は実践するためにある、と言わんばかりです。

１）兄弟共同体と御言葉

「耳を傾けて—声に従いなさい」

小教区の中では多くの言葉が語られ聞かれますが、しばしば喧騒と熱狂的な雰囲気に圧倒され、言葉を聞き分けて、それぞれに正しい意味を持たせる能力を失う危険があります。

聖フランシスコは、霊でありいのちである御言葉を聞くために耳を傾けなさいと言っています。「耳を傾けて」という表現は、聞きたいという願いを必要とし、その結果、傾聴する修行をすること、語りかけておられる主に耳を向けることを必要としますが、

それは、現代ではなかなか受け入れられることではありません。同様に、小教区も、御言葉の最重要性を強調するために、傾聴する修行をすることを必要とします。このように耳を傾けることによって、上に述べた危険は避けられます。ただし、神の御言葉を傾聴したいという願いがあり、その傾聴を可能にするべく真剣に取り組む場合の話です。兄弟たちの声を聞くために、注意深く耳を傾けたいなら、この傾聴を優先しなければなりません。

兄弟たちが引き受けている小教区では、兄弟たち自身がこの優先事項のために時と場所を確保するように配慮することにより、兄弟共同体としてまず神の御言葉を聞くために耳を傾けなくてはなりません。聖体祭儀、時課の典礼、御言葉の祈りを込めた奉読、およびその他の儀式的なあるいは個人的な傾聴の形態において、兄弟たちは、神の御言葉を自分のものとし、神の考え方を少しずつ身に付け、悲惨で善に対立し、悪には敏捷で、これを望む（未裁可会則 22:6）ような自分の肉による人間性を日々変えてゆくのです。それは、日々霊的な人間に生まれ変わり、兄弟共同体が霊的な共同体になるためです。兄弟一人ひとりが、預言者イザヤの次の言葉を自分のものとするように求められています:「朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし、弟子として聞き従うようにしてくださる」（イザヤ 50:4）。そうすれば、御言葉それ自体がその一致させる力をもって、兄弟たちを一つにし、兄弟たちの中に、御言葉を理解する同じ基準を与え、息子たちが共に御父から学ぶように、共通の表現方法を与えるように働きます。

このようにして、修道的兄弟共同体（religious fraternity）は、その存在自体が神の御言葉の証しとなっています。[16]　これは、

---

[16] ベネディクト１６世　「13 回目の奉献生活の日に寄せての講話」2008 年

小教区に住み、心の耳を御言葉に向けて傾けようとする人々に雄弁に語りかける証しなのです。この証しは、兄弟として共に御父の御言葉を聴きたいと願う人々の群れを形成する役に立ちます。

同じいのちの御言葉によって共に召し出されたと考えている人々の兄弟共同体は、「預言の場」となります。私たちは聖霊の働きの下で清貧の生活を通してイエス・キリストに従う時、福音を生き、宣言し、すべての被造物と兄弟愛で結びつけられて福音化する兄弟的共同体として世界に派遣されていると考えています。[17]

心を尽くして守る

聖フランシスコのこの言葉は、種についての福音書のたとえ話を思い起こさせます。道端や石だらけの所に蒔かれた種は根を下ろすことができないし、茨の中に蒔かれた種は、茨に覆いかぶされて実ることができません。種が実を結ぶかどうかは、すべての言葉の中で主の御言葉を第一に大切に考えて、それを心から受け入れるかどうか、それを堅く守る意思があるかどうかによるのです。

聖フランシスコの呼びかけは、現代では非常に特別な意味を帯びてきます。「心を尽くして守ること」は、現代のように慌ただしく、夥しい量の互いに矛盾したメッセージがいかにも巧妙に魅力的に提供される時代に生きる私たちにとっては、とても困難な課題です。今日では気を散らすものに絶えず取り囲まれているために、御言葉を守ることは難しく、私たちを取り囲む生活環境の浅薄さが、御言葉を奪い、私たちを御言葉のメッセージとその預言

---

2 月 2 日。

[17] ヘルマン・シャルック OFM、「全世界をキリストの福音であまねく満たすために」72。

的な力から遠ざけてしまうのです。

いったん受け止めた御言葉を失わないようにするための最も有効な手立ては、「それと共に立ち止まること」です。キリスト教の伝統の流れの中で、この**立ち止まること**には、様々な名称や形態が与えられてきました。たとえば、祈りを込めた奉読、黙想、研究、熟考、祈り、観想、レクチオ・ディヴィナ等。このようなラインに沿って、総長は兄弟たちに次のように勧めています:「御言葉に親しみ、自らを御言葉に近づけ、御言葉の中に入り込んでそれを求め、御言葉に耳を傾けるために静寂をつくり、御言葉に精通し、心を燃え立たせるような御言葉を記憶の宝石箱に保管し、御言葉に新鮮な驚きをもって接することです。そうすれば、フランシスコのように、神のリズムに従って動くことができます。《**私たちの生活はその若さを取り戻すでしょう**。》」[18]

立ち止まるためのヒントとなる素晴らしい模範がフランシスコの中にあります。「実際、彼の心はイエスのことで占められていました。つまり、彼の心の中に誕生なさったイエスは、その口や耳、その目や手、そしてその体の残りの全てに居られたのです」(1 チェラノ 115)。これらの表現から、心から受け入れられた御言葉が聴く者の心と体に同化し、聴く者を徐々に御言葉の内容に近づけつつ、ついには、御言葉そのものであられるキリストに似た者とされることが容易に見てとれます。ですから、聖痕もまた、御言葉が心から受け入れられ、守られたしるしでもあります。御言葉はそれを愛する者を御自分の愛する者に似たものとされるという形で実を結び(大伝記 13:5 参照)、フランシスコをもう一人のキ

---

[18] ホセ・ロドリゲス・カルバッリョ、OFM、2008 年聖霊降臨祭に寄せた手紙、「御言葉に導かれて意味を乞い求める者」20。

リスト（Alter Christus）に変容させたのです。

小教区においては、「御言葉と共に立ち止まる」とは、御言葉のために適切な時間を設け、自らを御言葉によって福音化することです。一人の弟子にすぎない状態から使徒となるのは、この**立ち止まる**という行為によって起こるのです。そこにおいてこそ、極めて重要な出会いが起こり、聖書の文言が、問いかけ、方向を示し、存在を豊かにする生きた言葉となります[19]。師御自身が自らを現わされ、人の知性と心を磨いてくださいます。「御言葉によって信仰の目は熟し、現実とその出来事を神のまなざしで見つめることができるようになります。そしてついには、“キリストの心”を持つにいたるのです。」[20]

この点について、教皇ヨハネ・パウロ２世は、奉献生活者に対して次のように語りかけています：「立ち止まり、聖書で黙想すること、特に福音書による黙想を飽くことなく続けなければなりません。そうすることによって受肉した御言葉である方の特徴があなたの上にも刻まれることでしょう。」[21]

この立ち止まりを実り豊かなものにするために、そして、小教区の顔に神の目に見えるしるしを刻印するためには、次のことに注意を払うことが不可欠です。

- 聖書の祈りを込めた奉読
- 一人で考える時間
- 勉強して聖書についての知識を深める
- 神学の知識を常に新たにする

---

19 ヨハネ・パウロ２世の使徒的書簡「新千年期の初めに」39 参照（2002 年）。
20 「キリストからの再出発」24、2001 年の指導書 CIVCSA（奉献生活省）。
21 ヨハネ・パウロ２世「5 回目の奉献生活の日に寄せての説教」2001 年 2 月 2 日。

- 時のしるしを共同体として読み、解釈する
- 福音の文化内開花（受肉）の観点から、文化や地域独自の文化を認め、絶えずそれに注意を払う
- あらゆるレベルでの対話についての生涯養成

その後に御言葉を心を尽くして守るために、御言葉と共に**立ち止まる**具体的な方法は、勉学です。フランシスカンの伝統を振り返れば、本会の組織が、生活の聖性と知識という二本の柱の上に建てられるべきであることがわかります(エクルストン 90参照)。だからこそ、フランシスカンの偉大な教師たちは、沈黙と聖性との実り豊かな対話の素晴らしい模範として示されているのです。[22] 福音を告げ知らせるのに不可欠の支えである勉学は、私たちにとって、福音宣教が根本的に必要とするものであり[23]、それゆえに、「勉学が《私たちの生活の質を高めるのに役立つ》[24]ことを心に留めつつ、知的養成を促進することが、本会において今日かつてないほどに必要とされているのです。」[25]　また、それゆえにこそ、神の御言葉についての集まりのような聖書研究グループが　小教区で重要な位置を占めているのです。

完全に果たしなさい

御言葉に耳を傾けて、それを守る心構えの後に、フランシスコは決定的で不可欠の要素を加えています。すなわち、受け止めた御言葉を実践するようにと。「実際、黙想の目的とするところは、

---

22 「勉学綱領」2001年プレゼンテーション。

23 ヨハネ・パウロ２世、「サン・ディエゴの総集会に寄せたメッセージ」1991, 6。

24 「勉学綱領」2001, 1c。

25 1991年の総集会総括文書「今日のフランシスコ会と福音宣教」10。

御言葉を生き、具体化させることです。[26]」このような実践の要素、御言葉の具体化なくしては、福音を真に理解したことにはなりません。生活とかけ離れた知識は「聖書の霊に従うことを望まない修道者」を死に追いやると聖フランシスコは戒めています（「訓戒の言葉」7、５参照）。

実際、フランシスコにとっても、フランシスコ会にとっても、御言葉を知り、それを具体化する唯一の真の方法は、それを実行することに他なりません。実行には体験的な知識が伴います。つまり、心の中で御言葉と向き合い、絶えず、「主よ、私に何をお望みですか。」と問いかけ、そして、「主よ、喜んで仰せの通りにいたします」と答えることです（三人の伴侶の伝記 6:13）。ローマ教皇は、御言葉についてのシノドスを開催した日に、教会について次のように述べています:「福音を告げ知らせることが存在理由であり、使命であるならば、教会は自らが告げ知らせることを知り、それを実践しなければなりません。それは、教会の説教が、それを提供する人々の弱さや貧しさと相反することなく、信頼に足るものであるためです。」[27]

それゆえ、小教区で私たちフランシスカンの伝統が促進しようとしていることは、御言葉を肌で具体的に感じ、絶望的な日々の状況にあってもそれを実現することです。

２）御言葉に奉仕する兄弟共同体

小教区で働く福音化する兄弟共同体は、御言葉の中に「生活、祈り、そして日々の旅路の糧を見出し、一つの考えのうちに共同

---

[26] 「意味を乞い求める者」27。

[27] ベネディクト１６世、第 13 回司教たちのシノドスの開会式の説教、2008 年 2 月 5 日。

体を統一する原理、継続した刷新と使徒的創造性そのもの」[28]を見出します。こうして、兄弟たちは福音的で預言的な自由人となり、「福音宣教のために献身する御言葉の真の奉仕者」[29]となることができるのです。

御言葉に養われた兄弟たちは、出会う兄弟姉妹たちを同じ御言葉で養いたい、そして、自分が聞いたこと、見たこと、思いめぐらしたこと、手で触れたことを生活と言葉で伝えたいとの燃えるような熱意を感じています（ヨハネの第一の手紙 1:1 参照）。小教区は、大きな食卓となることができます。その食卓で、神の御言葉の宴会を準備し、惜しみなく、十分に、しかも、生の体験から得た力をもって人々に振る舞うことができるのです。こうして、小教区は神を体験する場となり、そこで、人間であることや、出来事や、歴史や自然界や、生ける神に向かうすべてのものの中に秘められた神秘の深みを味わうことができます。[30]

私たちに対し、神の御言葉は内的な要求をしています。つまり、兄弟たちを召し出し、集めて兄弟共同体とし、彼らを福音化して御言葉にかなうものとしたからには、兄弟たちを派遣されるのは御言葉それ自体だということです。御言葉のダイナミズムは預言者や使徒たちに顕著に現れています。聖人の生涯に見られるのも、同じダイナミズムです。フランシスコにとってもそうで、彼は、御言葉に酔って、「私は、すべてのキリスト者のしもべですから、すべての人に仕え、わが主の香り高い御言葉を伝えなければなりません」（全キリスト者への手紙 II:2 参照）と明言するほどに御言葉のしもべとなっていました。

---

28 「キリストからの再出発」24。
29 「新千年期の初めに」24。
30 「キリストからの再出発」24 参照。

兄弟たちは、フランシスコの弟子として、御言葉に捧げるべき第一のつとめは、主への賛美です（全兄弟会にあてた手紙 8)。

私たちの小教区では、おそらくこうした賛美の態度は、神の御言葉に対するフランシスカンの典型的な要素として強く求められているはずです。賛美、神秘、驚嘆の念、不思議に思うこと、喜びに満ち溢れることは、心による理解が知的理解と融合していることを示すものです。聖フランシスコが兄弟たちに差し出した招きこそは、私たちが神について語り、神を賛美すべきだという確信から出たものです。「なぜなら、主があなたたちを全世界にお遣わしになったのは、言葉と行いで、主の御教えの証しをたて、彼以外に全能の神はましまさないことを、すべての人に知らせるためだからです。」（全兄弟会にあてた手紙 9 参照）

フランシスカンの小教区の特徴は、秘跡と信心業が福音宣教の場となるように注意を払いつつ、秘跡と信心業による福音化を優先していることのように思われます。小教区は、御言葉が聞かれ、心から受け入れられる特別な場であり、そこから、御言葉は人々の心に届けられるのです。御言葉を告げ知らせるための数々の方法を提供するに当たっては、特別な配慮がなされなければなりません。

- 聖書教育
- 人々への様々なミッション
- 主との出会いの役に立つよう、経験的な時と場を用意する
- 黙想会と霊操
- 個々人に相応しい傾聴と同伴
- 様々なコミュニケーション手段の活用
- キリスト者としての生活への導入グループのため、また、信

仰の成熟のために使われるカテキズム

● 対話と出会いのための様々な取り組み

御言葉を原動力とした小教区の共同体は、教会共同体から遠ざかってしまっている人々や若者たち、社会的に疎外された人々、教会に行ったり祈ったりすることをやめてしまった人々、そして、教会の敷居を高く感じる人々に注意を払います。兄弟共同体は、信徒と協力しながら、使徒的な創造性と司牧的な想像力――これこそはコミュニケーションのもたらす実りの典型ですが――を持って、家庭訪問、人々との触れ合いや歓迎を促進しつつ、新しい形の出会いを生みだすことができます。時宜にかなった手段を示してくれるのも、それらの手段を支えてくれるのも同じ御言葉なのです。

神の御言葉と現代人との絆は、二つの忠実さを維持することが必要であることを教えてくれます。つまり、福音の教えへの忠実さと現代人への忠実さです。この複雑な課題に対して、兄弟たちは信徒との協力の下に、特別な方法で自らを支える必要があります。これを原動力にしたフランシスカンの小教区では、キリスト者の養成に多くを費やすことができるでしょう。それによって、信徒たちは希望と信仰の理由を示し、現代文化や宗教、そして現代社会の多元性との対話の重要性を示すことができるようになります。

御言葉を告げ知らせる重要な第一歩は説教です。特に聖書に基づく説教は重要です。小教区に暮らす兄弟共同体は、信徒たちの多くにとって、聖書に基づく説教が神の御言葉に出会う重要な時であることを良く知っています。だからこそ、説教が重要視されるのです。フランシスカンの伝統は説教について後世に伝えるべ

き豊かな財産を持っています。そのいくつかを見てみましょう。

- **聴衆への深い配慮**。フランシスコ会の説教に秀でた聖人たちは、人々の文化と言語を良く理解していました。彼らは人々の言語で神の言葉を語ったのです。自分の語ることを理解してほしいならば、現代人のことと彼らの言語についてもっと良く知らなければならないと、彼らの模範は私たちに促しています。このように、神の御子の声を聞くために耳を傾けることは大切で、今日の小教区が神の子らの声に耳を傾けなくてもよいということにはならないのです。
- **単純で、人々に理解できること**。聖フランシスコは「諸徳へのあいさつ」の中で、女王知恵を姉妹なる清い単純と結び付けています（諸徳への挨拶１）。短い単純な説教は、すべての人にとって聞きやすく、その中心的なメッセージは、自然に伝えるべき本質を捉えています。また、人々に分かりやすいというのが典型的なフランシスカンの説教の特徴で、多くの聖人たちは、自分の説教を実例とエピソード、生活体験と歴史によって豊かなものにしようとしました。そのため、彼らは自分を通じて神が語り、行われる善い言葉や行動について、決して誇ることも高ぶることもなく（未裁可会則 17:6、訓戒の言葉 2:3、8:3、12:2、16:1、21:2、28:1 参照）、大いに聴衆の関心を集めたのです。最終的には、この方法の模範は、聴衆の注意を惹き、御自分の教えを彼らに根付かせるために、たとえを用いて話し、具体的な生活の中からの実例を話すことを好まれた主御自身が示してくださっています。
- **内容が具体的であること**。説教者は常に祈りと勉学によって啓示の泉から渇きを癒すべきです。そして、その泉の上にこ

そ、説教者の信仰は立たなければなりません。さらに、聖フランシスコは、会則に次のように記しています：「その同じ兄弟たちに、私は戒め、勧める。説教する時には、熟慮した純粋な言葉で、人々の利益と霊的向上のために、悪徳と善徳、罰と光栄について話し、簡潔に語るようにと。なぜなら、主が地上において簡潔な言葉で語られたからである」（裁可会則 9:3-4 参照）。聖ベルナルディーノは、善い、短い、明確なという三つの形容詞でまとめられるような端的で分かりやすい説教の見事な証しを見せてくれています。

- **威厳をもって話すこと**。フランシスカンの伝統は、福音の教えを、言葉よりもむしろ生活によって告げ知らせていた説教者の模範を示してくれます。彼らの舌は、言葉と行いの食い違いのために恥じることはありませんでした。これによって、彼らは大いなる権威のしるしを与えられ、強烈な預言的力を持っていたので、聴衆を「私たちはどうしたらよいのか」（使徒言行録 2:37 参照）といった内的に決定的な質問をするに至らしめることができました。聖ボナヴェントゥラは、見事なまでに簡潔に、次のように言っています。神の御言葉を示そうとする人にとって必要なことが三つある。一つは内容のある知識、二つ目は、それを説明する雄弁さ、三つ目は、それら二つを裏付ける生活である。内容のある知識なしに、神の御言葉を示すことは危険であり、説明しても雄弁でなければ無駄であり、その二つを彩る生活がなければ浅ましいものになる。[31]

---

[31] 聖ボナヴェントゥラの「主日の説教」17:1, Sermoni Domenicali 17:1, Rome.　Citta Nuova Editrice, 1992 “Primum est scientia regulans, secundum est facundia exprimens, et terium est vita utrumque

● **創造性**。聖霊を福音宣教の主役と考えているフランシスカンの説教は、常に原稿では表しつくせない聖霊の働きに心を開きます。このように、聖フランシスコは言葉と行いを結び付け、時には行いが言葉の代わりとなることもありました。それほどに彼の行いは雄弁だったのです。現代にはそぐわない様々なスタイルの説教が昔からありますが、それらは、当時は人々のニーズに十分に応えるものでした。昔の説教のスタイルは、文化が変わってきているために、そのまま使うことはできないにしても、神の御言葉を現代にふさわしい形で、文化内開花させる新しい表現を探すための刺激剤になっています。

この側面に関する考察のための提言

① 以下のものを読み、黙想し、真剣に取り組みなさい：

- マルコ 3:13-19、ルカ 10:10-24、ロマ 10:14-17、1 コリント 9:15-18。
- 未裁可会則 17:1-7、裁可会則９
- 会憲 22 条、83 条、99 条、100 条、103 条、「全世界をキリストの福音であまねく満たすために」49, 50, 58, 62, 65, 84, 85、「養成綱領」12 、27、29、「勉学綱領」63－66、
- 「主は道々私たちに話してくださる」14、17、「エヴァン

---

confirmans. Proponere enim verbum Dei sine scientia regulante est periculosum, sine facundia exprimente est infructuosum, et sine vita utrumque decorante est ignominosum. (Domenica III in Quadragesima, Sermi 1. Introductio in Opera Omnia, IX, 222a, Ed. Quaracchi.)

ジェリイ・ヌンチアンディ（福音をのべ伝える）」11：12, 43。

・ 「新千年紀の初めに」39-40、「奉献生活」94、「キリストからの再出発」24。

② この側面のどんなところが、兄弟共同体の生活および小教区の生活に表れていますか。共同体全体で識別した後、いくつかの良いと思われることを取り入れたり、強化したりしなさい。

２．全ての被造物と共に霊と真理をもって礼拝する人（liturgia）

それで、兄弟の皆さん、可能な限りの愛をこめてお願いします。あなたたちの最善の力を尽くして、私たちの主イエス・キリストのいと聖なる御体と御血に最大限の尊敬と誉れを捧げてください（全兄弟会にあてた手紙 12）。

聖フランシスコは、主を自分の全存在の中心にして、典礼において現存され働いておられるキリストの神秘を身にまとって生きたのです（2 チェラノ 127 参照）。フランシスコは自分が携わる典礼の中でキリストを中心にしましたが、それは、教会の指針に従うと同時に、本当の意味で素晴らしい創造性のうちに行われる典礼の全ての行為とジェスチャーの真の心髄である霊の勧めに心を開くことでもありました。そこにおいて、彼の全人格、兄弟なる肉体までもが、ふさわしい場所を見出したのです。たとえば、彼は主の受難を崇敬していたので、受難の場面をいつも読み、それに涙し、それについて祈り、追体験しました（遺言 4-5、大伝記 4:3,13:1-5、三人の伴侶 24）。神との関係を祝う方法は様々であることを示してくれたのは聖霊でした。実際、信徒の中に住まわれ、信徒を神殿にして、霊と真理をもって礼拝することができるようにしてくださるのは聖霊なのです（未裁可会則 21:30、訓戒の言葉 1、全キリスト者への手紙 I1:6、全キリスト者への手紙 II:10,48 参照）。フランシスコは、自分にとって福音についての説教の言葉が「聖霊の言葉であること」（裁可会則、全キリスト者への手紙 II:3 参照）そして「キリスト者がすべてを越えて憧れ望まなければならないことは、主の霊とその聖なる働きを持つこと

であること」（裁可会則 10:8 参照）を心から確信しています。だからこそ、彼は、祈りと献身の精神が何よりも大切であり、現世のあらゆる物事はこの霊に従属すべきである（裁可会則 5:2 参照）ことを説いているのです。

１）御聖体を中心とした兄弟共同体

フランシスコは御聖体の中に、御自身を兄弟たちに食物として差し出された御子が毎日お生まれになるのだと考えていました。そして、このような仕方で、主は世の終わりまで、人々と共におられることを実感していました（訓戒の言葉１参照）。彼にとって、「聖体祭儀の中心性は、フランシスコ会全体に明確に委ねられた、生きている現実なのです。[32]」フランシスコは確かに次のように述べています:「いと高いお方について、私たちがこの世で手に取り、肉眼で見るものといえば、ただ、主の御体と御血、書きしるされた御言葉だけです。そして、この方によって私たちは創られ、購われ、死から生命へと移されたのです」（聖職者への手紙 3、遺言 19 参照）。また、彼は当時の慣習に従い、次のように願っていました：「兄弟たちのとどまっている場所では、ただ一つのミサが、毎日聖なる教会の規定に従って捧げられるように」と（全兄弟会にあてた手紙 30 参照）。また別の折には、キリストの御体と御血の拝領を勧めています（未裁可会則 20:5、訓戒の言葉 1:12-13、全キリスト者への手紙 I:1:3、2:2、II:22-24、63、全兄弟会にあてた手紙 17-19 参照）。

フランシスコの模範に倣い、兄弟共同体は、第二バチカン公会議が教えているように、「典礼は教会の活動が目指す頂点であり、

---

32 「全世界をキリストの福音であまねく満たすために」77-78。

同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉である[33]」と考えて、典礼を生きること、特にキリストの御言葉とキリストが御自身を御聖体という形で捧げてくださった賜物を生きることを目指しています。キリストの御言葉と御聖体は、フランシスカンの共同体と小教区の共同体を構成する二つの不可分の現実なのです。

兄弟共同体が御聖体を中心にした時

- **共同体は御言葉といのちのパンの食卓で形成され、構成されます**。御言葉と御聖体とのつながりについて、総長は次のように書いています:「神の御言葉と御聖体によって結ばれた共同体との間に、また、神の御言葉への従順と聖体祭儀を祝う共同体との間に、そして、信仰の強さと主の御言葉への愛着との間に、さらに、神の御意志の識別と神の御言葉についての熱心な黙想との間には、深い親密な関係があることを、兄弟の皆さんに思い起こしていただきたいと思います。」[34]　また、御言葉に関するシノドスの開会にあたり、ウーレット枢機卿はこのように述べています:「御言葉という形で信じられ、肉という形で食べられるならば、告げ知らされた御言葉と捧げ物のために発せられた御言葉は、同じ秘跡という出来事に与っていることになります。」[35]
- **共同体は兄弟的な交わりの術、相互受容の術、兄弟たちの多様性を尊重する術を身につけ**、「それぞれを在るがままに」受

---

[33] 「典礼憲章」10。
[34] ホセ・ロドリゲス・カルバッリョ、2006 年臨時総会への総長の報告書「明晰さと大胆さをもって」35。
[35] M.ウーレット枢機卿、2008 年 10 月 6 日の「司教たちのシノドスのための第一回会議に宛てた報告書」11,1a。

け入れることができます（会憲 40）。このことは、御聖体を兄弟共同体の命とする典礼の基本原理です。

- フランシスコに倣うことによって、**共同体は小ささの精神を養います**。フランシスコは御聖体の中に御自分を無にされた神の謙遜の表れを見ていました。「ああ、なんと驚嘆すべき偉大さ、なんと驚嘆すべき御稜威。ああ、なんと偉大な謙遜、なんと謙遜な偉大さ。全宇宙の主、神、神の御子が私たちの救いのために、小さなパンの形色のうちに隠れるほどへりくだられるとは」（全兄弟会にあてた手紙 27-29、訓戒の言葉 1:16-18 参照）。「小ささ」をこのように観想することから、小さき者への優先的な愛が自然に生まれ、「小ささ」は神の謙遜を雄弁に物語るイメージとなります。
- **共同体は**、御聖体という土台がなければ、何事もなし得ないとの認識から、**福音宣教のエネルギーを引き出します**。御聖体はすべての福音宣教の源であり、目標であるからです[36]。事実、宣教への望みは、「キリスト教的生活の聖体に生かされた形の本質的な要素」[37]なのです。
- **共同体は**、特に主が教えてくださった祈りを通して、**ゆるしを乞い、また与える力を得ます**。「私たちの罪をおゆるしください。私たちも人をゆるします。」この祈りこそは、ゆるしの教えです。「なぜなら、ゆるしを与える人、ゆるしを受ける人は、より偉大な真理があることを知っているからです。」[38]

---

[36] ヨハネ・パウロ２世の 2003 年回勅、「教会に命を与える聖体」（Ecclesia de Eucharistia）22。
[37] ベネディクト１６世のシノドス後の使徒的勧告「愛の秘跡」、2007 年 84。
[38] ヨハネ・パウロ２世、第 35 回世界平和の日（2002 年 1 月 13 日）のメッセージ「正義なしに平和はなく、ゆるしなしに正義はありません」13。

ですから、ゆるしという内的な行為が安定した態度となるためには、神の慈しみ深い愛を体験することが常に必要なのです。[39]

- **共同体は**、御言葉をいのちに変える**受肉の方法を知っています**。それによって、祈りを行動から切り離す危険性を回避することができます。キリスト者の信仰の心髄をなす筆舌に尽くしがたい言葉、すなわち、肉となられた御言葉は、受け取った御言葉にどのように接したらよいかを示してくれる最高の教えでもあります。御言葉は肉となるしかないのです。
- 共同体は、日々平和のしるしを交わし、それを内面的に生きて、真実と喜びのうちにそれを語るにつれ、平和の兄弟共同体となります。
- 共同体はまた、貧しい人々と連帯し、正義と平和と被造物の保全のために働くことによって成長します。なぜなら、共同体はいのちのパンと日々の糧とのつながりをよく認識しているからです。

２）兄弟共同体は典礼によって福音化する

最近、本会は自らを「派遣されて宣教する使命を帯びた観想的兄弟共同体」(Fraternity-contemplative-in-mission) と表現しています。この表現には、福音を告げ知らせることが私たちの存在理由であることへの気づきと、福音宣教の根幹は観想と表裏一体であるという確信が含まれています。神を豊かに抱いた心だけが、神について語ることができます。神と共に立つということは、

[39] 聖職者省、1999年回章「司祭とは師であり、奉仕者であり、導き手である」3.3

それだけで既に、素晴らしい福音宣教であり、小教区がその信徒たちに提供できるものです。

兄弟共同体は、典礼を用いて様々な方法で福音化します。そのことは、特にフランシスコ会の豊かな霊的かつ司牧的伝統を思い起こせばわかります。そこには常に一貫して見られることがあります。それは、救い主の神秘に思いと心を結び付けるような「はっきりとわかる」何かを信徒たちに示そうとする配慮です。いくつか例を挙げますと、グレッチオの飼い葉桶、キリストの受難の姿を示すこと、イエスの御名への信心、十字架の道行き、聖体礼拝、四旬節、射祷、無原罪の聖母への崇敬、天使と聖人への信心など。

神の民を典礼と「祈りの業」[40]によって福音化するためには、フランシスカンの伝統の多様な豊かさとその創造力を考慮に入れて、以下のような方向性を示したいと思います。

- **聖体祭儀とそれを重んじる霊性を養うこと**。聖体祭儀に関する最善の福音化教育は、荘厳に行われる聖体祭儀そのものです。「小教区の多くの活動の中で、“主の日に行われる日曜日の祭儀と感謝の祭儀ほど生き生きとしていて共同体を生み出すものはありません。”[41]」聖フランシスコ自身かつて私たちにそのことを教えてくれており、信心の種類の多さよりも、聖霊の御働きの下で私たちを高め、変容させる出会いをもって、聖体祭儀の質を重視し、秘跡の神秘的体験を可能にすることが大切です。[42]　ここで、情熱をもって行われることによ

---

[40] 「新千年期の初めに」32。
[41] ヨハネ・パウロ２世の使徒的書簡「主の日」35（1998 年）。
[42] R. Falsini, Eucharistia in Disionario francescano, Padua, Ed. Messagero, 1995, 623, 611-639.

り、それ自体雄弁な説教となっていた聖人たちによるミサに与っていた多くの信徒たちのことを思い出さずにはいられません。

- フランシスコの言葉に従い、**御聖体の秘跡に尊敬と誉れを捧げること**。これほど至聖な神秘を行う人は皆、特に不法に行っている人々は、主の御体と御血が犠牲としてその中やその上で捧げられるカリス・聖体布・祭壇布がどんなに粗末であるかを、深く反省しなければなりません（聖職者への手紙 4 参照）。御聖体に対するフランシスコとクララの愛がどれほど深いものであったかは、その書き物を読めば明らかですし、主の御体と御血に対する数々の配慮と気遣い溢れる行動にも表れています。現世において、いと高き神の御子について、目で見るものといえば、ただ、主の御体と御血だけなのです（遺言 10、聖職者への手紙 3、クララの伝記 28 参照）。二人の証言は、こうです：「あなたたちの最善の力を尽くして、私たちの主イエス・キリストのいと聖なる御体と御血に最大限の尊敬と誉れを捧げてください」（全兄弟会にあてた手紙 12 参照）。
- 小教区の祈りの生活において、**時課の典礼を重視すること**。「時課の典礼は、特に詩篇によって信仰の日々の糧を提供する、キリスト教の典礼季節と日々のリズムを考えて作られた、極めて優れた教会の祈りです。[43]」小教区の信徒たちと共に祈る兄弟共同体は、それゆえ、時課の典礼、特に朝の祈りと晩の祈りを自分たちの手で、神の民の霊的生活の糧とする必要

[43] 2008 年の司教たちのシノドスにあてた最後のメッセージ「教会の生活と使命における神の御言葉」9。

を感じています。[44] **これまでと異なる新しい形の祭儀と信仰の分かち合いを生みだすこと**。そのために教会の伝統が勧告していることは、レクチオ・ディヴィナ（神の御言葉の黙想）や総長が勧めている御言葉の祈りを込めた奉読です。「それは、神へと向かう旅路であり、すべての旅路がそうであるように、この旅路もまた、旅人のペースとエネルギーとリズムに合ったものでなくてはなりません。その結果、御言葉を読み、聞き、受け入れ、祈り、観想し、日々の生活の中で具体化することによって、神との一つの出会いが生まれるのです。」[45]

- **典礼と生活を一致させること**。自分の具体的な生活を典礼に持ち込み、日常生活を祈りとしていたフランシスコの模範に倣い、小教区は、典礼が人々の生活となるような「学び舎」となります。その中で、信徒たちは生まれ変わり、自分の置かれた環境で神の国を築きたいとの思いに駆られるようになるのです。
- 沈黙と平和のオアシスとして、**黙想にふさわしい場を準備すること**。小教区の中で、集会所のそばに一人で祈れるような場を設けるとよいでしょう。可能ならば、霊的な刷新を促し、被造物や創造主との一体感を味わえるような自然環境が理想的です。創造主との親密な関係の中でこそ、ペトロをしてタボル山で「先生、私たちがここにいるのは、素晴らしいことです」（ルカ 9:33）と言わしめた喜びを体験しつつ、いのちの大切さを理解することができるのです。[46]

---

[44] パウロ 6 世の 1970 年の使徒的憲章「ラウディス・カンティクム」8、および典礼秘跡省による「時課の典礼の原則と規則」40 参照（1971 年）。
[45] 「意味を乞い求める者」25。
[46] ヨハネ・パウロ 2 世、2003 年、聖なる典礼に関する「典礼憲章」の 40 周

- 霊性の源として、また、文化内開花の方法として、**庶民の信心の価値を認めること**。なぜなら、多くの人々にとって、「自分たちの生来の特性にあった仕方で信仰を生きたいという望みが大きいからです」（会憲 92:2）。また、様々な形の信心を生みだした庶民の知恵を尊重し、真の福音の精神に従って正しく浄化するのはよいことです。
- **小教区内で、フランシスカンの霊性を支持すること**。偉大な人間的・霊的豊かさは本会の伝統の多様な表現にあることを知って、聖霊の力で主イエス・キリストの御旗の下に御父に立ち返るのを促進しましょう（全兄弟会にあてた手紙 50-52 参照）。
- 「アシジの精神」で、他の宗教の信仰者たちとの祈りの集いを育てながら、世界平和を胸に、**エキュメニカルな特徴を持って典礼を祝うこと**。
- ゆるしの秘跡のために、また、信徒の心に神・兄弟・被造物との和解の精神を育むために、**ゆるしの祭儀についての効果的な教育方法を見つけること**。
- **素朴さを示し、歓迎を表明すること**。典礼の行為は言うに及ばず、聖なる場所や修道院、近隣までもが居心地の良い、穏やかな雰囲気で歓迎の精神を示すよう、典礼全体が素朴な美しさを備えるべきです。
- **「最も重要な司牧活動の帰結は霊性である」ことを心に留めること**。霊性と神への礼拝を中心に考えないならば、いかなる司牧計画も、いかなる宣教プロジェクトも、いかなる福音

年記念に寄せた使徒的書簡「聖霊と花嫁」（Spiritus et Sponsa）1。

宣教のダイナミズムも失敗に帰する。」[47]　観想に長けた目だけが、いわば超自然的な洞察を獲得する[48]ために何をなすべきかを知り、外見を見極めることができ、真の福音的選択に向かうことができるのです。

この側面に関する考察のための提言

① 以下のものを読み、黙想し、真剣に取り組みなさい。

- ヨハネ 4：21－24、13:1-20、マタイ 26:26-29、1 コリント 11:17-27。
- 「訓戒の言葉」1:8-23、全兄弟会にあてた手紙 23-37、会憲 19、20、21、「全世界をキリストの福音であまねく満たすために」78、養成綱領 13、14、15。
- 「エヴァンジェリイ・ヌンチアンディ」（福音をのべ伝える）47、48、「新千年紀の初めに」32-37、「奉献生活」95。
- 「キリストからの再出発」26。

② この側面のどんなところが、兄弟共同体の生活および小教区の生活に表れていますか。共同体全体で識別した後、いくつかの良いと思われることを取り入れたり、強化したりしなさい。

---

[47] 聖職者省「小教区共同体の司祭、司牧者、導き手」2002 年の指令、11。
[48] ヨハネ・パウロ 2 世の使徒的勧告「奉献生活」94。

３．交わり（koinonia）のためのしるしと働き手

「兄弟たちは、自分たちの間で営むその同じ兄弟的交わりを、すべての人に及ぼすことを求める」（会憲 87:1）。

理想的な小さき兄弟のことを考えていたフランシスコは、理想的な小さき兄弟についてこのように述べています:「善い小さき兄弟は、次のような聖なる兄弟たちの生活を模倣し、その真価を己のものにすべきです。兄弟ベルナルドの信仰・・・、兄弟レオの単純さと純粋さ・・・、兄弟アンジェロの礼儀正しさ・・・、兄弟マッセオの上品な容姿と天性のセンスの良さに加えて、気品と敬虔さに富む雄弁の才能・・・」（完全の鑑 85）。このような兄弟共同体に、さらには、このような具体的な兄弟共同体にこそ、真の小さき兄弟が生きており、共同体にはそれを構成する兄弟各人の個性があるのです。

フランシスコが自分の会を「この兄弟の集まり（fraternity）は、小さき兄弟会(OFM)と呼ばれるべきである」（2 チェラノ 38、会憲 1:1 参照）と望んだのは当然の帰結であったのです。つまり、兄弟共同体は私たちのカリスマの基本要素を成しており、フランシスコを中心として形成されたグループの質を示し、このグループの外部の世界との関わり方を現わしているということです。それゆえ、会憲の第三章の題名は「あなたがたはみな兄弟である」（未裁可会則 22,23 参照）となっており、それは私たちの起源を思い起こさせると同時に、会憲の第五章の題名「神はあなたがたを全世界にお遣わしになった」（全兄弟会にあてた手紙 9）がそれ

を説明しています。これこそは私たちの生き方であり、この世での在り方なのです。[49]

1）交わりの証しである兄弟共同体

ヨハネ・パウロ２世は、使徒的書簡「新千年紀の初めに」の中で、「神の御計画に忠実であることと、この世界の強い期待に応えること」、そして、「交わりの霊性を促進すること」を優先課題として説いています。「それは、教会の秘義の本質そのものを受肉し、表現している[50]」からです。教皇はまた、使徒的勧告「奉献生活」の中で、次のように述べています：「教会は、交わりの霊性を育てる固有の役割を、奉献生活の共同体にゆだねています。この役割は、まず、奉献された人々の内的生活の中で果たされ、続いて教会共同体の中で、愛に満ちた対話を始め、継続することによって、ついにはその境界を越えて果たされます。」[51]

私たち小さき兄弟たちは、小教区の司牧においても、**交わりの学び舎**に貢献することができますし、またしなければなりません。なぜなら、私たちは「派遣されて宣教する使命を帯びた観想的兄弟共同体」として生まれたからです。この共同体は、その中で交わりを生き、それ自体が交わりを形成する共同体、同じ御言葉の食卓で自らを養う共同体、その存在意義がこの御言葉を告げ知らせる共同体なのです。

具体的にはそれはどのような形を取るかと言うと：

● **主のうちに互いに愛し合う兄弟たちの共同体**となって、神の

---

[49] Abdrea Boni, “Fraternita in Dizionario francescano”, 715-730、および「明晰さと大胆さをもって」59 以下参照。

[50] 「新千年期の初めに」42。

[51] 「奉献生活」51。

御言葉を最も大切にし、御聖体の食卓を囲んで集まる共同体、共同で祈り、いつも共にあり、仕事や計画を分かち合い、共に参加し、評価し、感謝し、くつろぐ共同体です。今日では、かつてないほどに、共同体として聖性を証しすることが必要とされています。奉献された人々を、交わりの神によって内的に形成された「交わりの真の専門家」[52]とする必要があります。[53]

- **共同体の全てのメンバーを巻き込んで**。生活による証しは、兄弟共同体を構成するすべての兄弟、すなわち、聖職者の兄弟、ブラザーの兄弟、若い兄弟と高齢の兄弟、健康な兄弟と病気の兄弟が様々な職務を通して、それぞれのカリスマを認めながら行うことができるし、また、行わなければなりません。
- **兄弟共同体が必要とする場所や時間と小教区司牧に必要な責務との間のバランスに気を配って**。これは現代に求められている深刻な課題です。真剣な使徒職のほかに、しかるべき祈りと兄弟的交わりの時間を神と兄弟たちに捧げる術を知っていた主イエスと聖フランシスコの模範は、私たちにとって、平和なバランス感覚をもって内的に過ごす時間と外的に活動する時間を決めるという困難なつとめを果たす助けとなります。

２）交わりのために働く兄弟共同体

内的に真の人間的かつ霊的な交わりを生きている兄弟共同体は、

---

52 「奉献生活」46。
53 「キリストからの再出発」29。

ひとえに小教区の人々をはじめとしたすべての人々の共同体のために働いているのです。それは、

- **交わりと対話の共同体**。そこでは、連帯と普遍的な兄弟性に心を開いた態度で、真のカトリック精神が生きています。たとえば、置かれた場所とその地域が抱える諸問題との関連性や、多様な文化を持つ人々の共同体の形成、他の小教区や教区教会との協力などに注意を払いつつ、宣教者精神に駆り立てられた修道家族。
- **司牧計画を持ち**、各々が共同体の構成員であるということから出発して、独自の貢献を成し得る兄弟共同体として発展し、実現した共同体。修道院長も主任司祭もすべてのカリスマを受けているわけではありませんが、全体性のカリスマ、すなわち、各人の才能を認める能力は備えています。同様に、修道院長と主任司祭の関係は、しばしば未解決の問題とか、少なくとも困難な問題と考えられていますが、交わりの論理によって初めて解決されます。
- **共同責任が実践されている共同体**。すべての兄弟の間で共同責任が取られている兄弟共同体は、共同生活の価値というものを外に示す能力を持っていることになります。それによって信徒は責任感を持ち、各々の持つ賜物やカリスマや使徒職の多様性が促進され、教会の新しい種々の活動との関係が尊重され、様々な小教区委員会が然るべく重視されるようになります。
- **フランシスカン家族と協力する術を知っている共同体**。小教区の兄弟たちは、在世フランシスコ会（SFO）やヤング・フランシスカン（GIFRA）の自立を尊重すると同時に、彼らに小教

区の司牧活動に効果的に参加するために必要な教育と指針を与えつつ、彼らの活動を、特別な配慮をもって促進します。それによって、彼らは在世フランシスカンの霊性を社会に広めることができ、適度に世俗化された現実の中に神の国の価値観を樹立するために働くことができます。ヤング・フランシスカンの活動の場は、人生の意味を探し求めている若者たち、確実な霊的体験を求め、福音と出会うことを求め、教会の生活に与ることを求めている若者たちに向けられています。

- **管区の兄弟共同体から派遣されていること、そして**福音宣教のための管区プロジェクトの指導に従い、**管区と一致して生きることを意識した共同体**。
- **教区との交わりと、その構成員としての関係を保ちつつ生きる共同体**。特に「キリストを愛するとは、教会の人々や様々な会の中で教会を愛することであることを決して忘れずに、主任司祭との効果的で情愛のこもった関係」[54]を築きます。それは、聖フランシスコが行ったように、そして、次に、特に司牧方針や計画において、フランシスカンの様式で参加し協力します。このフランシスカンの様式は、聖霊が教会に与えた賜物である私たちのカリスマを守るために、教区と管区とで取り交わされた協定に明記されなくてはなりません（総則53)。[55]

---

[54] 「キリストからの再出発」32。

[55] その他以下参照：奉献生活省「相互関係」*Mutuae Relationes.* Note directive 57b in 1979.　私たちの規則と教会法によれば、司教と小教区を委託された管区長との協定は、任意のものではない。協定は書面で取り交わされ、当事者双方の署名が必要である。その目的は、管区・兄弟共同体・主任司祭の責任と権限を明らかにすると同時に、教区司教の責務と権利を明らかにすることであり、私たちのカリスマを守ることである。確かに、私たちは

● **「私たち」の方法論を活用する共同体**。これには、兄弟性と対話と交わりの精神を、小教区でのあらゆる司牧活動に生かすことが含まれます。具体的には、プロジェクトを作成実行し、共同体を組織し、地域の他のグループや他の修道会や様々な文化の人々と関わりを持ちながら。

この側面に関する考察のための提言

① 以下のものを読み、黙想し、真剣に取り組みなさい。

- ヨハネ 15:1-17、マタイ 18:15-22、1 コリント 12:1-30
- 未裁可会則 5、裁可会則 10、シエナの遺言 3
- 会憲 38、39、40、42、52、55、「全世界をキリストの福音であまねく満たすために」69-72、86-87、養成綱領 19-21、「主は道々私たちに話してくださる」31
- 「エヴァンジェリイ・ヌンチアンディ」（福音をのべ伝える）41-42、46、48-52、「キリストからの再出発」28-32

② この側面のどんなところが、兄弟共同体の生活および小教区の生活に表れていますか。共同体で識別した後、いくつかの良いと思われることを取り入れたり、強化したりしなさい。

小さき兄弟たちとして小教区を活性化しなければならない。

４．貧しい人々の間にあることに満足し、平和の推進者となる（diaconia）

「それで、主は自ら私を彼ら（重い皮膚病の人々）の中に導いてくださいました。そこで、私は彼らを憐れみました。そして、彼らのもとを去った時、以前の私には耐え難く思われていたことが、私にとって魂と体の甘美に変えられました。」（遺言 2-3）
「卑しくて見捨てられている人々の間や、貧しく体の不自由な人々、病人、重い皮膚病を患った人々、道ばたで物乞いする人々の間で生活する時、喜ぶべきである。（未裁可会則 9:2）
「主は私に挨拶の言葉を啓示してくださいました。私たちはこう言うべきです。“主があなたに平和をあたえてくださいますように。”」（遺言 23）

御言葉と典礼は、愛の中で自然に発展してきました。御言葉と典礼と愛との間には深い関係があり、私たちはそれを主イエスのペルソナの中に見ることができます。主は御言葉の啓示であり、御自身を「祭壇として、生け贄として、祭司として、そして最高の愛として渡されることによって、御言葉は最高の典礼となりました。それは、主が人として生きておられた時に、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべて癒された[56]」からです。また、フランシスコの生活のなかにも、同じような深いつながりを見ることができます。それは、受け入れられ、黙想された御言葉が、情熱的な祭儀を生み、兄弟愛の中に具現さ

[56] 復活節の叙唱５、年間主日の叙唱８参照

れた時です。

特に、フランシスコの愛は、社会の中の最も小さき人々、すなわち、病人、弱者、乞食など取るに足りない存在としてたやすく拒絶され、追放され、排除された人々へと向けられています。フランシスコは、最も小さき人々を優先的に愛することによって、御托身と祭壇の秘跡において「小さなパンの形色のうちに隠れるほど」（全兄弟会にあてた手紙 27 参照）へりくだられて小さくなることを選ばれたいと高きお方を称えたいと望みました。ポヴェレッロ（小さき貧者）は、自分を無にして僕の身分になり、へりくだって、十字架の死に至るまで従順であられた（フィリピ 2:5-8 参照）神のように生きることを望み、祝福された処女と弟子たちと共に、施しによって生活する「貧しい人、しかも寄留者」でした（未裁可会則 9:5 参照）。だからこそ、かれは主の模範に従うことを決意し、弟子たちにも同じようにすることを勧めたのでした。「すべての兄弟は、私たちの主イエス・キリストの謙遜と清貧につき従うよう努めなければなりません」（未裁可会則 9:1 参照）。

従って、「天上と地上との間にある平和、すべての人々の間にある平和、私たちの心の中にある平和」は、日曜日の朝の祈りの賛歌となっており、主がフランシスコに啓示された「主があなたに平和を与えてくださいますように」（遺言 23）との平和の挨拶とメッセージをすべての人に送りたいと願っていた、平和を愛し、平和の造り手であったフランシスコを表しているように思われます。真の平和は神だけが与えてくださることを確信していたフランシスコは、神からのこの平和の賜物に満たされていると感じ、自らをすべての人のための平和の使者としました。

１）小ささの証しである兄弟共同体

小ささは、小教区でのフランシスカンの兄弟共同体としての在り方を表現しています。フランシスカンの兄弟共同体は、清貧の生活を通して兄弟たちの在り方と生き方が輝くようなものでなくてはなりません。それは、謙遜に営まれ、神への信頼を特徴とし、最も貧しく苦しんでいる人々と連帯のうちに分かち合うことができ、自らを喜んですべての人のために捧げ、他者の足を洗うことを模範とするような生活です。

さらに、小教区で働く兄弟たちは、他のすべての人を、謙虚に、自分より優れた者と考えなければなりません（フィリピ 2:3)。そして、平和と正義の道具となることによって、兄弟たちは人間の地位向上のために、人権の擁護、環境の保護、命あるすべてのものの保全のために働くのです。教会の社会教説を学び、知らせ、紛争のあるところでは平和のための教育をして、平和を促進します。貧しい人々、病人、苦しむ人々や疎外された人々のそばにいることによって証しします。なぜなら、兄弟たちはそうした人々がどうしてそのような状況に置かれたのかその原因を知って、彼らが尊厳のある生活をするのを助けたいと願っており、また、常に世間の真っただ中で宣教しているのだという意識を育もうとしているからです。

小さき兄弟たちに委ねられた小教区は、小ささの中に無限の豊かさを見出します。なぜなら、神が肉の衣を借りて「小さき者」となられ、御自身を幼子とされ、枕するところを持たぬ寄留者として旅人としてこの世の街々を歩かれ、捕らえられて、兄弟たちへの愛ゆえに十字架に付けられて亡くなられ、日々いのちの糧として御自身を渡されるからです。そのような神を一体誰が恐れる

でしょうか。むしろ、御自身は僕となって私たちを救ってくださる神のことを告げ知らせることによって、人間の心の奥深くに触れ、頑なな心を溶かすことができます。このような表現しがたい恵みに気づいている兄弟たちは、そうした告知が言葉よりもまず生活の証しによってなされるように、あらゆる方法で努力し、この受肉された神が御自分のものとして選ばれた様式で小ささを生きるのです。従って、兄弟たちは、神が彼らを通してなさり、言われる行いと言葉のゆえに自慢したり、得意になったりせずに、すべてをすべての善の創り主であられる神にお返しするのです（未裁可会則 17:6、訓戒の言葉 2:3、8:3、17:1、18、21:2 参照）。

２）世間の真っただ中で奉仕する兄弟共同体

「現世においては、旅人、寄留者として清貧と謙遜のうちに主に仕え」（裁可会則 6:2）

私たちは、特に最も貧しい人々と共に生命と死のしるしを体験しつつ、世間の真っただ中で小さき者として兄弟的な生活を送ります。こうして再び「イエスの生き方と行動」[57]を提示するのです。フランシスカン的な小ささで営まれる小教区は、常に御父の御計画に従うために御自分を無にし、へりくだって仕えられた主イエスの模範を眼前に見ていなければなりません。主がフランシスコとその弟子たちを通して教会と世界にお与えになった小ささという偉大な賜物は、小教区司牧に特別な、紛うことなき特徴を染み込ませ、それ自体が偉大な証しとなり、強烈な福音宣教のメッセージとなっています。

小教区の中で小ささを生きるためには、以下のことが必要です。

---

[57] 奉献生活 22。

- **人々の間で奉仕する態度**。人々の間にいることで、私たちはいっそう人々と関り、他者の立場になって考えることができます。もっとよく理解でき、分かち合うことができるのです。生活を他者と分かち合うことによって、私たちは再び自分の生活を福音宣教の第一の方法とすることができます。それは個人的な触れ合いであり、たくさんの道具を必要としない、それでいて効果的なお金のかからない方法です。こうして私たちは、個人との接触を常に第一に考えていた善き羊飼いに倣うのです。
- **関わりのしるし**。これの意味するところは、世界と信仰との関係、社会生活と信仰生活との関係、広い意味での政治と福音との関係を深めるような福音宣教を促進することです。それはまた、教会の社会教説の指針に従い、同時に、人間や権力や平和、善、自然に関するフランシスカン的な視点に従って、社会的・政治的な関わり、そして文化的な関わりを深めることをも意味します。たとえば、特に社会における人間の地位向上を図って、在世フランシスカン（SFO）やヤング・フランシスカン（GIFRA）との協力体制をつくることなどが挙げられます。また、教師や文化人、政治家を組織的な活動に携わらせ、神の国の価値観で励まし、小教区のオープンで堅固なプロジェクトに積極的に参加させることが大切です。
- **まじめでしかも喜びに満ちた**。これの意味するところは、強力でお金のかかる手段に頼ることでもなければ、福祉活動のためでも社会の発展のためでもなく、むしろ、貧しい手段を選び取るということです。それはまた、世間や消費主義が崇拝の対象とするものを放棄する預言的な態度をも意味します。

それは、まじめで本質的なものを大切にする人々の文化を支え、その結果、事物から解放されたことに由来する喜びがもたらされます。

- **貧しい**。修道生活が「最後の裁きの日についての福音書の一節の生きた解釈である」（マタイ 25:32 以下参照）ことを心に留めて、小教区で働く兄弟たちは、飢えた人、のどが渇いている人、旅人、病人、牢獄にいる人、そして困っている人々に手を差し伸べます。「私たちの教師である」貧しい人々（会憲 93:1）に対するこのような配慮は、社会的支援という形でのみならず、そばにいて耳を傾けること、そして、人間の地位向上を図り、すべての人が互いに手を携え合って、様々な活動で連帯するように行われます。それは何よりもまず、出かけて行って、時間をかけ、心血を注いで、共に問題の解決を探ることなのです。そうすることによって、小教区は、「妨げられることなく、依存することもなく、貧しい人として、また、もっと貧しい人の友として、新しい、あるいは古い形のあらゆる貧しさを喜んで受け入れつつ」[58]生きることができるようになります。「ない」という現実、たとえば、仕事がない、土地がない、屋根がない、書類がない、教育がない、といった現実に対して特別な配慮が払われます。それと同時に、薬物依存症者、ＨＩＶ感染者、売春に従事させられている人々、政治を主導する人々から排斥された人々、あるいはそういう社会文化的階級の人々への配慮も忘れてはなりません。私たちに特有のこうした関わり方すべてを鼓舞する精神とは、とりもなおさず、貧しいキリストに従って生きることなのです。

---

[58] ヨーロッパにおける教会 105。

- **兄弟共同体のパン種**。それは、教会共同体を周囲の現実に開放することです。その手段は、兄弟共同体のパン種となり、生命と平和と正義と貧しい人々のために働くこと、他の宗教や文化の中に「御言葉の種子と神のひそかな現存」(会憲 93:2)を探すこと、一般のキリスト信徒に、政治的な活動も含めて、積極的に社会参加するように適切な準備教育を施すことです。
- **被造物を称える人**。特に被造物を尊重するということに関して、フランシスカン精神を鼓舞された小教区は、姉妹なる母なる大地に向けられた搾取に対して抗議しなければなりません。それには、母なる大地を神の美の現れとして考え、称えていたフランシスコの模範に倣い、母なる大地を大切にし、尊重する態度を身につけることが必要です。
- **主を愛して**。何を始めるにしても、その前に必ず、主の愛のうちに生きる人だけが効果的に人々、特に貧しく困窮している人々の心を惹きつけ、彼らに仕えることができるのだということを思い起こさなくてはなりません。まことに、主の愛こそは、いかなる司牧活動にも実りをもたらすことができ、その成果は、人間の能力ではなく、復活の主の力に基づいているのです。[59]

この側面に関する考察のための提言

① 以下のものを読み、黙想し、真剣に取り組みなさい。

- **マタイ 5:1-12、6:24-34、20:24-28、フィリピ 2:1-11**
- **裁可会則 3:10-14、5、6、未裁可会則 4、5、6、遺言 19:23**

[59] ヨハネ・パウロ２世回勅「救い主の使命」23（1990 年）。

- 会憲 64-71、93、96、97、「全世界をキリストの福音であまねく満たすために」120、121、149-164、養成綱領 22-25、88、「主は道々私たちに話してくださる」28、35
- 教会憲章 8、現代世界憲章 40、「エヴァンジェリイ・ヌンチアンディ」（福音をのべ伝える）29、30、32、37、38、「新千年紀の初めに」49-52、「奉献生活」82、「キリストからの再出発」36

② この側面のどんなところが、兄弟共同体の生活および小教区の生活に表れていますか。共同体全体で識別した後、いつくかの良いと思われることを取り入れたり、強化したりしなさい。

５．全世界に派遣されて（missio）

なぜなら、主があなたたちを全世界にお遣わしになったのは、言葉と行いで、主の御教えの証をたて、彼以外に全能の神はましまさないことを、すべての人に知らせるためだからです。（全兄弟会にあてた手紙９）

教会の生活と使命における御言葉についてのシノドスは、御言葉が声を持っている、すなわち啓示であること、顔、すなわちイエス・キリストであること、家、すなわち教会であること、歩くべき街、すなわちミッションであることを思い起こさせてくれました。[60] イエスは、御自身をすべての人に出会う道とされ、御父の御言葉として御自身を人類の中心に植えられました。すべての福音宣教者は、主に続いて主の御旗を掲げて歩きながら、福音を植え付けるために、世界の街々を巡ってきました。フランシスコもまた、街の中に神の御言葉を告げ知らせるための効果的な演台を見出していました。

主の弟子となるためには、主と共にいてその御言葉に耳を傾け、それを守ることが必要です。そして、主の使徒となるためには、主の御名において出かけることが必要です。このようにして、「留まること」と「出かけること」は、いずれも互いに不可欠な関係、切っても切れない関係として結ばれています。告げ知らせるために出かけることができるためには、まず御言葉と共に留まることが必要です。同様に、御言葉と共に留まることによって、告げ知

[60] 2008 年司教たちのシノドスの最終メッセージ参照。

らせるために足を一歩踏み出すことができます。

１）ミッションを生きる兄弟共同体

会を創設した目的は「愛する兄弟たちが、二人ずつ組んで地上の至るところに出かけ、人々に平和と罪の赦しのための悔悛を宣べ伝えること」（1 チェラノ 29）であることを、フランシスコは最初からはっきり認識していました。しかもそれは、まだ兄弟が８人しかいない時だったのです。フランシスコは、ウゴリノ枢機卿が会の活動を厳しく制限しようとする前から、この信念を堅持していました。「主が、この国の人々のためにだけ仕えるようにと兄弟たちを遣わしてくださったとお考えですか。それともそのように信じておられるのでしょうか。はっきり申し上げます。主は世界中のすべての人々の霊魂に益するように、また、その救いのために兄弟たちを選んでお遣わしくださったのです」(ペルージア伝 82)。

創立時のことを考え、何世紀にもわたってこの地上をキリストの福音で満たしてきた多くの宣教者たちのことを思い起こす時、今日の兄弟会が「派遣されて宣教する使命を帯びた観想的兄弟共同体」として集まっているということはふさわしいことです。兄弟会はまた、神と共に留まりながら、世界中に福音を宣べ伝えるために遣わされた小さき兄弟たちであり続ける兄弟共同体であり、「人間の心、文化、宗教の奥底には、《生きた水》への渇望があること」[61]を確信して、イエスの計画と同じ「見ることのできる心」[62]で旅に出かける兄弟共同体なのです。

---

[61] アジアにおける教会（Eclesia in Asia）18。
[62] ベネディクト１６世回勅「神は愛」31。

１９８２年にヨハネ・パウロ２世は、ローマ市内で宣教を始めようとした兄弟たちに向かって、このように語りました：「現代の人々に出会うために出かけなさい。彼らが出向いてくれるのを待っていてはなりません。あなた方自身で人々を集めるのです。愛が私たちにそうするように求めています。“全世界に行きなさい”とのイエスの言葉は、福音宣教に限りなく普遍性を持たせており、世を巡るという特徴を備えたあなた方の霊性にとてもよく似ています。」[63] 同じ教皇は、その講話の中で、私たちの召命が座して待つことではなく、出かけて行って出会うことであり、兄弟たちを探し求めることであることを思い起こさせ、そのような活力が愛から来るものであり、そればかりか、イエス・キリストに見られる神の態度であることを強調しています。確かに神は人間に語りかけるだけでなく、人間を探し求めてくださるのです。[64]

小教区で司牧する兄弟共同体は、この宣教の活力に基づいて生き、行動します。それが真に愛の求めるものであるからです。この共同体は、内にひきこもる誘惑をすべて退けて、キリストの「出かけなさい」という御命令があらゆる形で、その生活と仕事に絶えず反映するように努めます。それゆえ、すべてのプログラムは、キリストとフランシスコが出かけて行く姿をモデルとしています。それ以外のことについては、ミッションがあらゆる司牧計画及びプロジェクトを最も啓発するモデルなのではないでしょうか。ミッションは、おそらく、小さき兄弟が受けた召命の賜物を神に「お返しする」最高の表現なのではないでしょうか。[65]

---

[63] ヨハネ・パウロ２世、1982 年、ローマ市の信徒を対象とするミッションを引き受けたフランシスカンへの講話 15,11

[64]「紀元 2000 年の到来」7。

[65] OFM ラテンアメリカ会議、*コルドバ文書（アルゼンチン）*参照 2008,4。

小教区では留まることと出かけることの調和のとれた構成がたやすく実現するものではないことを忘れてはなりません。宣教者であることと矛盾するような留まり方にはある種の危険が伴います。私たちがここで扱っているのは、小教区におけるフランシスカンの行動を制限するような司牧上の誘惑、すなわち、普遍の教会と全世界の視界を曇らせるような誘惑です。具体的にいくつか見てみましょう。

- 来ている信徒たちに満足してしまうこと、既存のものを守ろうとすること、今までいつもこのようにやってきたのだと伝統にしがみつくこと。
- 香部屋や修道院に「閉じこもり」、司牧を秘跡授与にのみ限定してしまうこと。
- 第二義的なことに没頭してしまうこと、それは、本当の危険になる可能性があること、「たとえば、官僚化、機能主義、大衆化の危険性、司牧的であるよりも管理的になる危険性、必ずしも必要のない組織を増やして身動きをとれなくすること。」[66]
- 人間を育成することよりも、活動することや、多くの試みを組織することの方にエネルギーを費やすこと。
- フランシスカン・カリスマの聖職者的な側面ばかりを強調すること。
- 小教区の運営にあたってフランシスカン的な特徴を打ち出さないこと。

小教区司牧を、閉鎖的な守りの姿勢になる危険や特定の周辺地

[66] 小教区共同体の司牧者であり、指導者である司祭, 29。

域を標準化したり、誇張したりする危険に陥らせないためには、小教区で働く兄弟共同体は、私たちの霊性の特徴的側面を力強く回復して、一種のコペルニクス的転回を果たさなければなりません。さらに、福音化するミッションが本会の存在理由であることを常に心に留めながら、フランシスカン的なスタイルのミッションを引き受ける熱意を絶えず持ち続けることが求められているのです。そうすれば、その結果は、

- 生活の証しをたてる**魅力的な兄弟共同体**となります。それは、御父の最初の宣教者であられるイエスのお姿を目に見える魅力的なものにするような生活で、人々が必要としている聖性の芳しい香りとその憧れを広めることによって可能となります。兄弟たちに求められていることは、兄弟愛による矯正といつも他の人々の足下にとどまる（訓戒の言葉 19:4 参照）幸せを生きつつ、何よりもまず、福音を証しする名人となることです。そのような兄弟共同体は、司牧上最優先されるものが、聖性、すなわち、実践され、よりレベルの高いキリスト者の生活によって示される聖性であることを知っています。[67]
- **旅の途上にある兄弟共同体**となります。それは、信徒たちを惹きつけながら、同時に、小教区に来ない家族に会うために出かけ、彼らに耳を傾け、励まし、連帯感を示し、自らの信仰を分かち合おうとの熱意に駆り立てられて証しすることのできる兄弟共同体なのです。それはまた、病気や悲しみの中で生きている人々、疎外され、おそらくは自分の苦しみを打ち明ける相手のいない人々をも惹きつける兄弟共同体です。この共同体は、いまだ福音によって照らされていない世界、

67 「新千年期の始めに」30-31 参照。

たとえば、コミュニケーション、芸術、文化、経済、政治、娯楽の世界に目を向けています。[68] つまり、「平和の福音を告げる準備を履物としながら」（エフェソ 6:15）、その心には、与えることによって強められる信仰を与えたいとの願いを抱きつつ、[69] 救い主によって派遣されたと感じている兄弟共同体なのです。

- **人を歓迎する兄弟共同体**は、真の人間的で霊的な出会いを祝うことができ、出会った人を、彼らの話に耳を傾けつつ、ゆるしの秘跡と慰めの奉仕によって、温かく受け入れることができます。そのような兄弟共同体は、教会の敷居の外に暮らす人々を歓迎する術を知っています。確かに、奉献生活は、単に教会の中や教会のためだけに生きて満足していることではないのです。それはキリストと共に、他のキリスト教諸教会や他の宗教、またいかなる宗教をも信じていないすべての人々に向かうものなのです[70]。
- 「からだ全体を舌のようにした」（1 チェラノ 97）フランシスコの模範に倣った**預言的な兄弟共同体**は、その兄弟的生活と、典礼と、御言葉の共通のプログラムでもって、人々に告げ知らせます。御言葉の共通のプログラムは、人々をさし招き、彼らに善と美を提案し、命の尊さに光を当てます。この共同体は、声なき人々の声となりながら貧しい人々のために立ち上がり、勇気を持って、「霊の剣、すなわち神の言葉を取って」（エフェソ 6:17）この世の悪を糾弾します。この共同体は新たな行動を起こしますが、そうした行動は、これまで支配的

---

68 「救い主の使命」37 参照。
69 「救い主の使命」2。
70 「キリストからの再出発」40。

だった行動に取って代わるものなので、今日では特に雄弁です。たとえば、より福音的な節度をもった生活様式に変えることとか、お金のかからない手段を選ぶとか、疎外された人々と身近に接するとか、弱い立場の人々と連帯するなど。

- **扉を常に開放している兄弟共同体**は、修道生活のスケジュールを一般の人々の生活のリズムに合わせる術を知っています。兄弟共同体は、旅人であり寄留者であるがゆえに、実際の旅人や外国人、複雑な人生行路で傷づいている人々、自信を失っている人々、極限状態で生きている人々に対して自然と共感を持てるのです。

２）宣教者である兄弟共同体は宣教小教区を形成する

召命とカリスマのゆえに宣教者である兄弟たちで構成されている小教区の兄弟共同体は、小教区の地域に住むすべての人々がキリストを知り、キリストの愛を体験することを切望しながら、普遍的な宣教の世界に暮らしています。小教区の兄弟共同体は、今日の福音宣教が「その情熱においても、方法においても、また表現においても、新しく」[71]なければならないことを知っているので、新しいフランシスカン的な宣教のダイナミズムを生き、それを小教区の福音化に生かすことを目指しています。そうすれば、小教区は次のようになります。

- **宣教者たちの小教区**。「歴史の流れの中でキリスト御自身のミッションを続けている」[72]教会においては、小教区は、和解、ゆるし、平和、よそ者の受け入れ、正義、真理のために献身

---

[71] ヨハネ・パウロ２世、ハイチ、CELAM（ラテンアメリカ司教協議会）の集まりでの講話、19。
[72] 「カトリック教会のカテキズム」852。

的に働きながら、その領域内に神の国の一部（portion）を築きたいと願っています。福音化する兄弟共同体は、キリスト教徒に自分たちの召命の気づきを伝え、外に向かって宣教する召命を励まし、促進するために、その良心、霊性、ダイナミズムを独特な方法で教会共同体と分かち合います。こうして、福音化された信徒は、今度は自分が小教区における福音宣教者となり、外に向かって活動するのです。宣教者たちの小教区は、日々、三つのことを行います。すなわち、耳を傾け、歓迎し、出かけることです。

- **福音の最初の告知が響き渡る小教区**。「確かに、（福音を）告げ知らせることは、宣教する使命の中で常に優先事項です。[73]」「聖霊降臨後の使徒的説教の使徒的熱意がみなぎっている」[74] 小教区は、最初の告げ知らせを福音宣教プロジェクトの土台と考えています。まさに信仰をもたらすためであるがゆえに、小教区は福音を知らない人々に向かって働きかけます。たとえば、他の宗教の信仰者たち、まだキリスト教を受け入れていない人々、キリスト教を捨ててしまったか忘れてしまった人々、今日特に増えている諸宗教の「メニュー」を眺めて品定めをしている人々に働きかけます。福音の最初の告知の次に、自然の成り行きとして来るものは、主の栄光に満ちた再臨以外のなにものでもなく、その未来は、現在を希望で満たすばかりか、現在に意味を与えてくれるのです。
- より分かりやすく適切な言葉で**よいコミュニケーションのできる小教区**は、常に神の御言葉を現代人の言葉で効果的に告

---

73 「救い主の使命」44。
74 「新千年期の初めに」40。

げ知らせます。対話が福音宣教の最も優れた手段であることを確信している小教区は、対話の中に、率直さを身につけ、自分とは異なる人々に耳を傾け、彼らを受け入れ、自分のアイデンティティーを尊重しつつ彼らと融和できるように自己を訓練する真の学び舎を見出しています。ですから、そのようなコミュニケーションが生産的であるためには、パウロ６世が述べているように、「この世界を深い共感をもって見つめる」[75]ことが必要です。

- 「家庭の教会」[76] 家庭において信仰を伝えることを奨励する**家庭的な小教区**は、特に信徒のための多様な役割と使徒職において具現された、開放的で暖かく歓迎する家庭のような小教区家族を構成しています。そこでは、だれもが自分の召命にふさわしい場を見いだすことができ、聖霊の働きの証である自分の才能を生かす具体的な可能性を与えられます。福音宣教は、神の民全員を巻き込むものであり、キリスト者の家族として信仰を伝えることをはじめとする洗礼による司祭職を生き、実践するように彼らを招いているのです。責任ある人々は、「すべての信徒の口を開かせます。なぜなら、すべての信徒の中で、聖霊が息づいているからです。」[77]私たちは、画一性ではなく、本物の多様性の有機的な統一である一致のために働いています。
- **「境界線のない」修道院という小教区**。これは、宣教者グループの養成を刺激することによって、海外宣教プロジェクト、

---

[75] パウロ６世、ベツレヘムの洞窟での講話、1964 年 6 月 1 日。
[76] ヨハネ・パウロ２世の使徒的勧告「家庭―愛といのちのきずな」21（1981 年）。アフリカにおける教会 63 と 92 も参照。
[77] 「新千年期の初めに」45 参照。

できれば本会のプロジェクトとの具体的な協力を促進します。宣教者グループの中では、宣教についての教会の公の教えや本会の多くの文書から成る宣教者のカテキズムのようなものが学ばれます。信徒たちも、養成を受けるならば、宣教者グループが宣教者の熱意を表現する方法を改めて考えるのを助けることができます。

- **地域内のあらゆる貧困について敏感で、それに真剣に取り組もうとする小教区**。この小教区は、恵まれない人々への奉仕と慈善活動および平和のために働く方法を促進します。そして、主の平和の道具として、また異なる人種、異なる文化、母なる大地、神のイメージが輝くすべての被造物――創造主を栄光のうちに称える時に見られる――との和解の道具として生きるのです。
- **フランシスコの心を持った小教区**。ここでは、小教区の生活と旅は信頼して善き羊飼いに委ねられ、その羊飼いに導かれた「小さな群れ」のような気持ちの完全な喜びが育まれます。なぜなら、この司牧計画が「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ 28:30）との約束の確かさを教えてくれるものであることを知っているからです。

この側面に関する考察のための提言

① 以下のものを読み、黙想し、真剣に取り組みなさい。

- **マタイ 28:16-20、ヨハネ 20:19-23、使徒言行録 1:6-8**
- **未裁可会則 16:1、裁可会則 12:1-4a**

・ 会憲 116-118、「全世界をキリストの福音であまねく満たすために」143-148、165-175、養成綱領 32-33、37-38、71-74、「主は道々私たちに話してくださる」33、37-38
・ 「教会の宣教活動に関する教令」1、「エヴァンジェリイ・ヌンチアンディ」（福音をのべ伝える）51-56、「救い主の使命」33-34、37-38、72-74、「奉献生活」77、97-103、「キリストからの再出発」37-38

② この側面のどんなところが、兄弟共同体の生活および小教区の生活に表れていますか。共同体全体で識別した後、いくつかの良いと思われることを取り入れたり、強化したりしなさい。

小教区で兄弟性と小ささのうちに福音化するために派遣されて
翻訳・発行：フランシスコ会日本管区
発行日：２０１０年9月１０日
106-0032
東京都港区六本木 4-2-39
聖ヨゼフ修道院
03-3403-8088